
門の番人

成田チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

門の番人

【Nコード】

N8535S

【作者名】

成田チカ

【あらすじ】

僕、ダン・ウィーザーは現在高校生。普通の、といたい所だが、ひょんなことから「門の番人」と呼ばれる魔界とこの世界を繋ぐ道の出口となる「門」を閉じて魔物の侵入を伏せぐ役割をする一族の元で「番人見習い」として修行中。僕の幼馴染のジェニーは番人の一族の娘で、小さな頃から番人として働いている。

もうすぐ大学進学もあるっていうのに、僕の人生、どうなるんだろう…

- - - - -

この作品は、短編小説「門の番人」の続編として書かれている長編小説です。

Chapter 1

今宵は新月―。

月の無い夜には、魔界とこの世界を繋ぐ古い「門」が綻び、そこから魔物が外へ出ようとすることが度々起こる。

僕は内側からゆるゆるとぬるい空気を吐き出しながら不気味な声を響かせている小さな「門」を睨みつけ、その中央に向かって手をかざした。力をかざした掌に集中させると、掌が少し熱くなるのを感じた。

意識を目の前の門に集中させながら、僕は毎日復唱させられている言葉を口ずさむ。

「緩みし境界よ、元の姿に戻れ。歪みし空間よ、あるべき場所に戻れ…」

言葉が紡がれるに従って、身体全体が熱を帯びたように熱くなり、力が僕の身体を満たした。

今だ。

「閉じる！ 魔界の門！」

僕の言葉と共に、僕の掌から白い光が放射され、それは門に向かって一直線に注がれた。自分がやっていることとはいえ、目の前で起きていることが信じられない。

白い光に包まれた門は静かに身震いしながら閉じ始め、やがて完全に閉じると、空気の中に溶ける様に消え去った。僕はそれを見届けると、ふう、と安堵の息を漏らした。と、同時に僕の背後からパチパチと一人分の拍手の音が暗闇の中で鳴り響いた。

「お疲れ、ダン。ちゃんとして出来たじゃない」

この場にそぐわない呑気で明るい声の主は、長い黒髪を後ろに束ねた美少女だ。名をジェニーと言う。

ジェニーは門があった場所を確認すると、満足そうに頷いた。

「合格、合格。短い期間で、よく出来ました。おめでとー」

「……」

僕はまだ自分がしたことが信じられなかった。まさか、数ヶ月前のハロウィンにジェニーが僕の目の前でやってのけたことを、この僕が一人で出来るようになるなんて…。

「大丈夫？ ダン…」

自分の掌を見つめたまま返事をしない僕を心配したのか、ジェニーが首を傾げながら僕の顔を見上げていた。彼女の大きな青い瞳と目が合い、僕は一瞬、たじろいだ。

「な、何でもないよ…。ただ、ちよつと、驚いただけ…」

ジェニーは僕の言葉が理解できないという顔をして尋ねる。

「何で？」

「何でって…。えっと、それは…。僕が、自分で門を閉じることが出来たから…？」

「そりゃ、出来るに決まってるでしょ？」

ジェニーは得意気に微笑みながら言った。

「私とお父さんが、毎日あんなにシゴキまくったのよ？ 出来るに決まってるじゃない！」

こういう時のジェニーは、至って強気だ。いつものこととは言え、どうしてこんなに自信があるんだよ、こいつは。

僕は溜息を吐きながら言った。

「『決まってる』って…。あ、でも、シゴいてたっていう自覚はあるんだ…」

僕の言葉にフツツと嬉しそうに微笑みながら、ジェニーは言った。
「もう自分でもわかってるんでしょう？ 番人の素質があるって。本当、昔からこういう時だけ頑固よね、ダンって」

- - - - -

僕の名はダン。ダン・ウィーザー。

職業は高校生。それに加えて、最近は「門の番人」になるべく、

日々修行中。番人世界での身分は「番人見習い」なんだそう。何か、どこかのビデオゲームのキャラクターみたいな呼ばれ方だ。

この世には魔界と現世を繋ぐ道が至る所にあつて、その数や正確な場所は定かではない。一説では、道は常に作られ、消え、そしてまた作られるとか。

魔界とこちらの繋ぎ目は通称「門」と呼ばれ、それは通常は閉じられ、魔物がこちら側に出てこられないように、そしてこちら側の物が魔界に入り込まないようになっている。

ところが、この門が時々緩むことがある。その緩んだ門が、新月やハロウィンの時になると強まる魔界の波長の影響を受けて、開き始めることがある。

「門の番人」は、そんな緩んだり綻んだりした門を見つけ、封印を施して閉じることにある。

僕と一緒にいるこの呑気で能天気な美少女ジェニーの家は代々、門の番人をしている血筋なんだそう。その中でも、ジェニーはとりわけ番人としての能力が優れているのだそうで、彼女は幼い頃から一人前の番人として活動している。

僕は彼女の家の近所に住む幼馴染で、ごく普通の家庭に育ち、ジェニーの秘密は最近まで全く知らなかった。

キツカケは数ヶ月前のハロウィン。その日、僕は街の外れにある廃工場の中に出来た門を閉じるジェニーを目撃してしまった。

普通なら、そこで「僕はこの秘密を誰にも喋りません」とか言えばそれきりなんだと思う。だけど、幸か不幸か、その時僕には「門」が見え、門の中から響き渡る声が聴こえた。

今なら、あの時それをジェニーに言わなければ良かったんだと思う。ちょっとしたパニック状態に陥った僕はジェニーに「アレは何だったんだ」って尋ねてしまい、それを聞いたジェニーは、僕に番人になる素質があるのを知ってしまったんだ。

それから先はトントン拍子に、僕の立場を全く無視した状態で進み、ジェニーのお父さんとジェニーの下で僕が番人になるための修

行が始まった。ジェニーの家族によると、最近では番人も人材不足で、それでも減ることの無い門の対処に追われているのだとか。

番人の一族の血を引いていても、全員が番人になれるわけではないのだと言う。門を見る能力の無い者は、門を閉めることができない。例えば、ジェニーにはダグという兄がいるが、ダグは門を感じることは出来るが、見ることが出来ない。

僕が番人になることを、ダグは反対していた。一族の出でもない僕に番人が務まるわけがないと。僕が門を見たというのは何かの間違いだとも言っていた。でも、修行を始めて三ヶ月ほど経った新月の夜にジェニーと共に行った「仕事」で、ダグの僕への評価が変わった。

- - - - -

その日の気温は真冬らしい氷点下で、空気が刺すように冷たかった。ダグが運転する四駆車には、ジェニーと僕、それからジェニーの家で買われている2匹の猫のうち、黒猫のインキーが乗っていた。僕はジェニーの家の猫の存在は昔から知っていたけれど、彼ら実は「門探知猫」だと言うことは番人見習いになるまで知らなかった。彼らは僕ら人間よりも数倍、門の綻びに対して敏感で、この世界に現れた門の存在をどの番人よりも早く感じ取り、知らせてくれる。この日も、インキーが感じ取った門に僕らは向かっていた。

出発してから数時間後。車はまだ周りに何も無い高速道路を北に向かって走っていた。

「気配は感じてきてるんだが、まだまだ先かよ…。こりゃ、まずいな」

ダグが運転しながらそう呟いた時、助手席に座るジェニーの携帯が鳴った。ジェニーの膝の上に乗っているインキーは北の方角を見つめたままだ。

「ハロー。あれ、母さん？ なあに？ え？ 今？ そこから北に

3時間くらい走ったとこ。町の名前？ 町なんてないし。っていうか、周りに何も無いんだけど、ここ。どうしたの？ うん。うん。あ、それって、私達が今向かってるところかも」

ジェニーはそう言いながらGPSの地図を拡大した。

「あ、うん。その町にあと20分くらいで入るよ？ うん。ダグとダンが一緒。うん。わかった。じゃーね」

「おばさん、何だって？」

僕は後ろからジェニーに尋ねた。

「あのね、さつき、家に『上』から指令が入ったんだって。どうやら、私達が向かってる門ってかなり大きいらしくて、応援を頼まれたみたい」

「え？ 『指令』？」

以前、ジェニーのお父さんから教わった話では、番人たちの組合みたいなものがあつて、ある番人では対処しきれない門や、一度に沢山の門が1つの地域に大量発生した場合には、組合が他の番人に連絡を取って応援に行かせることがあると言う。

「どっちかな。このエリアの番人さんが役立たずなのか、それとも……」

ジェニーが徐々に毛を逆立て始めたインキーの背中を撫でながら言った。

「かゝなり、大きな門がお待ちかねなのか」

その声はいつものように明るい声だが、少し緊張の色が混ざっていた。

やがて門の気配が強まり、僕の肌には鳥肌が立ち始めた。

車はやがて小さな街を横切り、暗い森の中に入った。そこからは僕でも奇妙な圧迫感を感じることができた。

「ダグ。ここからは歩いた方がいいわ。これ以上は車は危険よ」

ジェニーがそう言うのとダグは車を止め、僕ら3人と一匹は車を降りた。生暖かい空気が辺りを包んでいる。三日前に降った雪がまだ

多く残る地面の上には、数人のものと思われる足跡が門の方向へと続いていた。

（この門は、大きい）

嫌でも、そう感じずにはいられなかった。僕が門に遭遇するのはこれが初めてではなかった。それまでも修行の一環として、ジェニーやジェニーのお父さんに門に実際に連れて行ってもらって、彼らが門を閉める様子を何度か見ていた。だが、それらのどれも、今感じているような圧倒されるような気配を感じることはなかった。

「まずいわね」

ジェニーが静かな口調でそう言った。

「うん」

僕は短い言葉を掛け合いながら、歩く速度を徐々に速めながら進んだ。ジェニーは何も言わなかったけれど、僕の勘では門は既にかなり開いてしまっているはずだ。何故なら、僕らはその時既に森の中でうごめく魔物の気配を感じていたから――。

番人が門を閉めるとき、門から出てきた魔物が門の傍にいたのであれば、それらを門の中へと吸い込ませて、門と共に封印することが出来る。だが、魔物が門から離れてしまうと、その力は及ばずに、魔物はこの世界で活動を始めてしまう。

「かなり出始めているようね。まずいわ。こんなに大きいってことは、門が開くのに時間も掛かったでしょうに。開いてからも、そんなに時間が経ってしまったの…？」

やっぱり、と思うよりも、ジェニーの顔に焦りの色が見えたことに僕は驚いた。

「ダン、ちゃんと手伝ってね？」

「わかってる」

開いてしまった門の封印は、単に緩んでいる門の封印よりも大きな力が必要とする。しかも、今、僕らが向かっている門はジャイアント級のようだ。そんな門が、開いてしまっている…。

「あー、もう。あそこでダグが道を間違えなければねー！！」

ジェニーの台詞に、顔を少し紅くしながらダグが吠えた。

「うつせーぞ、ジェニー！」

「だって、普通あんなところで間違える？ あの後、一方通行だらけで、元の道に戻るのにどれだけ時間掛かってるんだって話よ！ ついでに行き止まりで雪にタイヤをめり込ませるし！」

「悪かったな！」

「その分の仕事はちゃんとやってよね！」

「わかってる！」

僕は、この兄妹は相変わらずだなあと思いながら苦笑していた。昔から、仲がいいんだか悪いんだかわからない。でも、彼らの遣り取りのお陰で、多少の緊張が解れたような気がした。

やがて、目の前に現れたのは、僕らの想像を遥かに超える、巨大な門。

パツクリと口を開いたその門からは生暖かく、嫌な臭いをさせた空気がゆるゆると流れ、門から少し離れた所には、数名の人影がうずくまっているのが見えた。三十代から四十代くらいの大人たちが数名、途方に暮れたような顔をしてお互いの肩を抱き合いながら門を見つめている。彼らが協会に応援を要請したこの地域の番人達だろうか。

彼らは僕らに気が付くと、僕らの顔を見るなり、あからさまに落胆した表情をした。

「ちつ。やっと応援が来たと思ったら、子供^{ガキ}かよ……」

一人の男がそう吐き捨てたのを聞いて、ジェニーが彼らの前にズイッと仁王立ちになった。

「そこから、おどきなさいな」

ジェニーの言葉を、フン、と先ほど悪態をついた男が鼻で笑った。「お前らに何が出来ると言うんだ。お前らなんて、この門に飲み込まれるのがオチだぞ？」

ジェニーは「話にならない」と言うように両肩をすばめると、男を無視して彼らの横を通り過ぎ、門に近付いた。僕はジェニーの後

るにピタツと寄り添う形で進む。

「お、おい！ 聞いているのか！」

偉そうに威嚇する男の声に、ジェニーは「ああ、もう……」と忌々しげに呟くと、後ろを振り向かずに鋭い気を一瞬だけ放出させた。白い光がジェニーの身体から四方にブワッと放たれ、それだけで周りの魔物の気配が一瞬にして潜んだ。

「うおっ！」

「な、何だ……？」

大人の番人達がうろたえていると、その隙を逃さずにダグが悪態をついていた男の鼻先に銀色のサーベルの切っ先を突きつけた。

「おっさん。あんまりうるさくしてると、あいつらが神経集中できねーだろ？ 黙ってる」

「う。あ、ああ……」

ダグは自分よりも少し小柄な大人たちを睨みつけ、その場に座らせた。

ジェニーは巨大な門を上から下までじっくりと眺めると、1つ大きな深呼吸をした。

「やっぱり、デカイな……」

僕がポツリとそう呟くと、ジェニーが門を睨みつけながら言った。「出来るわよっ！ ダン。私の呼吸に合わせてね！」

「うん。わかった」

僕はそう言つてジェニーの斜め後ろに立ち、ジェニーの呼吸のリズムを感じながら門を見上げた。僕らの背丈の5倍はあるうかという高さを持つ大きな門は、闇を飲み込むかのような異様な雰囲気漂わせながらそびえ立ち、開いた扉の向こう側には、こちら側を伺っている邪悪な魔物の気配を感じる。

「ダン。手、貸して」

「手？」

「いいから、早く！」

僕が承諾する前にジェニーは僕の右手を自分の右手で勢いよく掴

むと、それを前にグイッと引つ張った。

「うわっ」

僕の身体がジェニーの背にくっついて僕は思わず声を上げたが、それと同時に僕の手を掴んだジェニーの掌から尋常ではない熱を感じて、僕の神経は全てそちに持っていていかれた。

「ダン。集中して！」

「わ、わかった…」

僕らは呼吸を合わせながら、僕の掌に神経を集中させた。身体が熱くなり、僕らの周りがぼうつと白く光り始めた。僕らの波動に怯えるかのように、門がキシキシと音を立てながら震え始めた。

「行くわよ」

「ああ」

ジェニーの呼吸に合わせ、僕らは共に詠唱を始めた。

「緩みし境界よ、元の姿に戻れ。歪みし空間よ、あるべき場所に戻れ…」

紡がれる言葉が、螺旋のように僕の身体を巡る。僕の手首を掴むジェニーの掌から、力が注ぎ込まれ、僕の掌が爆発するんじゃないかと思うくらい、力で漲みなぎっていくのを感じる。

「閉じる！ 魔界の門！」

僕の掌を介して、ジェニーと僕、二人分のエネルギーが門に注ぎ込まれた。そのあまりの勢いに、僕は左手でジェニーの肩を掴んだ。ジェニーの肩は華奢だけど、妙な安心感があつた。

白い光に包まれた門の扉が、地に響くような軋んだ音を立てながら少しずつ閉じられていく。だが、完全に閉じられ、消えるまでは気を抜いてはならないと、僕は常日頃ジェニーのお父さんから教えられていた。それはジェニーも同じようで、あれほど大きなエネルギーを僕の掌に流し込んでいたのに、ジェニーはまだ衰えない量のエネルギーを僕の腕に送り続けている。

（負けられない！）

ジェニーと張り合いたがるのは僕の悪い癖だが、こういう時には

いいかも知れない。

（負けるもんか！ 僕だって、やれる！）

そう思った瞬間、僕の中のエネルギーが物凄い勢いで門にかざしている掌に向かって流れ始めた。それと同時に門の中に向かって空気が逆流し始めた。

「くっ」

「お前ら、踏ん張れ！」

遠く、後ろのほうからダグが叫ぶ声が聞こえた。

「ダン。しっかり、掴まって…！」

左足を少し後ろにずらしてバランスを取りながら、ジェニーが言った。

「ああ」

僕とジェニーは1枚の薄い壁のようになりながら立っていた。僕らの周りには、門に吸い込まれる魔物たちの流れが出来ていて、僕らはその中で流れに逆らいながら気を送り続けた。

巨大な門の扉が、周りの空気を軋ませながら閉じていく。

「もう、少し…！」

「くっ」

地面を大きく揺らしながら門がピッタリと閉じられ、空気の流れが止まった。門が白い光に包まれるように淡く光り、やがてそれは緩やかに歪みながら、静かに空気に溶けて消え去った。そして、門のあった場所には雪の残る地面だけが残った。

「ふ、ふう〜。」

「はあ、はあ、はあ…。あー、しんどかった〜！」

僕とジェニーは、ほぼ同時に雪の積もった地面の上に倒れ込んだ。顔や手に当たる雪が、火照った身体に心地いい。

僕らはまるで全力疾走した後のように荒い息をしながら、お互いの顔を見合わせて笑った。

「やった、ね…。ダン」

「ああ。出来たな」

「もう…！ 私はちゃんと『出来る』って言ったでしょっ？」

「そう、だったね」

僕は力なく笑いながら重く感じる上体を少し起こして、まだ力の余韻が残る掌をジェニーに向けた。ジェニーは疲れた顔でうつすらと笑いながら、その手に自分の手をポン、と軽く打ちつけた。

「グッジョブ、私達…！」

「だな」

「あはは」

僕はゆっくりと身体を起こして立ち上がると、ジェニーに手を差し出した。ジェニーは意外と強い力で僕の手を握ると、少しふらつきながら立ち上がった。普段は僕よりも体力があるんじゃないかと思っていたジェニーも、今回ばかりは力を使い果たしたようだ。

ジェニーは僕の左肩にもたれ、僕はジェニーを支えるように抱きかかえながらダグたちのいる方へと歩き出した。いや、歩き出そうとした。

ダグがいるはずの方向へと振り返った僕達が見たものは、魔物に囲まれたダグと、大人の番人達だった。ダグの足元には、数体の魔物の骸が転がっていた。

「あらら。やっぱり、残っちゃってるわ、魔物」

ジェニーは小さく溜息を吐きながらそう言っていると、上目遣いで僕を見ながらあっさりと言った。

「私、もう力残ってないから。ダン、ちょっとダグを助けてあげて？」

「ええっ？ 僕だって、そんなにもう残ってないよ？」

確かに、ちゃんと立っていられる僕に比べて、ジェニーは少し辛そうだ。ジェニーは僕の肩に少し寄りかかりながら言った。

「大丈夫、大丈夫。少しハツタリ効かせれば、あの程度の雑魚は引いていくから」

「…ハツタリでいいんだな？」

僕は1つ深呼吸をすると、神経を身体を中心に集中させた。ハツ

タリなら、見せ掛けが大きい方がいい。

僕は息を大きく吸い込むと下腹に力を込めて気を身体から一気に放出させた。これは見せかけが派手な割に、コントロールがほとんどいらないから見習い番人の僕でも出来る技だ。

「失せる！！」

僕の気が白い光の筋になって、まるで爆発したかのように四方へ飛び散り、それに驚いた魔物がダグ達から離れた。

「上出来」

肩越しにジェニーから小さく賛辞が出された。

「サンキュ」

僕は身体中に倦怠感を覚えながら、僕に張り付いたままのジェニーを引き摺るようにしてダグの元へと歩いた。

「大丈夫か、ダグ？」

「ああ…。何とかな。だが、魔物が結構残っちゃってて厄介だな…。このままじゃ森から出れねーぞ、俺達…」

ダグの言葉に、僕の左腕がピクツと動いた。いや、性格には左腕に纏わりついていたジェニーの身体が、か。

少しの沈黙の後、ジェニーが口を開いた。

「やだ。お腹空いた。帰りた〜い」

情けない声を出しながらそう言うジェニーを、大人の番人達はあんぐりと口を開けて呆気に囚われながら見ている。そりゃそうか。

彼らが閉じられなかった門を閉じた張本人が、魔物の群れに囲まれながら言い放った台詞が、これだ。

「だけど、僕とダグは二人で笑い始めた。

「ハハハ。わーった、わーった。俺も腹空いてきたしな。じゃ、何とかするか」

と、その時、遠くの方で鈴の音が聞こえた。

「あれ？ あの鈴、インキーの…？」

「そう言えばあいつ、どこ行っちゃったんだ？」

チリーンという鈴の音に、時折何かが引き裂かれるような鈍い音

が混じり始めた。

「何だ、あの音…？」

眉間に皺を寄せながら耳を澄ますダグに、ジェニーが言った。

「ねえ、時々、『ぐへえ』みたいな声も聞こえない？ 嫌あゝ、ホラー映画みたい」

「いや、このシチュエーションは、もう十分にホラー映画だって、ジェニー」

やがて、強まる鈴の音、何か引き裂かれる音、「ぐへえ」に混じって、数名の雪を踏みつけながら歩く足音も混ざった。

「あ、インキー！」

暗闇から、黒猫のインキーが黄金に輝く瞳を爛々と光らせながら小走りに走ってきた。

「連れてきたわよん」

小さくウインクをしながらそう言うインキー（猫）に、僕は両目を見開いたまま硬直した。

（じゃ、喋った…？）

「連れてきたって、誰を？」

ジェニーはまるで、それが普通であるかのようにインキーに向かって話し掛けた。

「見りゃわかるわよ、ほら」

インキーが顎で来た方向を指すと、暗闇の中でうごめく人影とその合間に月の光を時折反射する何かが見えた。

（何だ…？）

やがてその中から一人の大柄な男性が姿を現した。少し薄汚れたトレンチコートを靡かせながら現れた彼は、右手に大振りな銀に光る剣を握っている。

「アル叔父さん！」

ジェニーがそう呼んだ男性は、ニヤッと不敵な笑みを浮かべながら、ジェニーに向かって「よお」と手を振った。

「魔物の気配が強かったんで来てみたんだが、正解だったな。で、

門は？」

「私とダンで閉めたわよ」

「ダン……？」

アルは僕を見ると、「ああ」と言いながら右手を差し出した。

「君がダンか。初めまして。俺はアル・オルセン。ジェニーとダグの叔父だ。君の事は、マイクとローラから聞いてるよ。番人見習いなんだって？」

「あ、は、初めまして。ダン・ウィーザーです」

僕はアルに差し出された手に僕の手を重ねて握手を交わした。アルの手は大きくてマメだらけで、そして暖かった。

「ヨロシクな、ダン。じゃ、ちよつと『掃除』が終わるまでの間、お前達はここにいろ」

アルはそう言いながら僕らを取り囲むように雪の上に円を描き、その外側に出ると跪いて地面に手をつくつと、ふと、顔を上げた。

「おつと。ダグはどうする？ やれるか？」

アルの言葉に、ダグの顔がパツと紅潮した。

「いいのか？」

アルはニツコリ笑いながら頷いた。

「ああ。あれからちつとは、自分で修行してたか？」

「もちろん！」

「じゃ、試しにやってみろ。雑魚相手なら、やれるだろ？」

「ああ！」

途端に元気になったダグが円の外に出ると、アルは地面に手を置きながらブツブツと何やら呪文のようなものを唱えた。やがて地面が少ししびれたように震え、僕らは白い光のドームに囲まれた。

「ちよつとした結界だ。あの雑魚相手なら、大丈夫だろう。俺達が戻るまで、そこから動くんじゃねーぞ？」

僕とジェニーは頷くと、二人で身を寄せ合うようにして座った。アルとダグの後姿が暗闇の中に消えた。

「疲れた……」

ジェニーがポツリと言った。

「ちよつとの間、ここで寝てれば？」

「うん。そう、する…」

そう言つてすぐ、僕の耳にジェニーの寝息が聴こえた。森の暗闇の中から聞こえる音が徐々に間を開け、やがて聞こえなくなった。森全体がシーンと静まり返ってからしばらくして、僕は雪を踏みしめながら歩く足跡を聞いた。やがて足音の方向からダグとアル、そして数名の男性が姿を現した。

「片付けたぜっ」

まるで全てが自分の手柄のように微笑みながら、ダグが得意気にそう言つと、アルがダグの頭をゴン、と拳骨で軽く殴つた。

「いつて！」

「調子に乗るな、ダグ。お前が殺つたのは、雑魚だけだろ？」

「けどよー、俺だつて、初戦だつたわけだし…」

頭を押さえながらブツブツと文句を言うダグを見ながら、二人の後ろにいた男達が笑つた。

「ま、初戦にしちゃ、悪くねーんじゃねーの？」

「そうそう、ま、筋はいい方じゃねーか？」

「あんまり煽てんな。調子に乗っちゃ、伸びるもんも伸びなくなる」
アルがそう言いながら、僕らの周りに張り巡らされた結界を解いた。

「おっと。姫さんは寝ちまつたか」

僕に寄りかかりながら眠るジェニーを見て、アルがフツと優しく微笑んだ。

「寝顔は、ちつこい頃のジェニーと同じなんだな」

それは僕も同じ事を思っていた。僕らが小さい頃、ジェニーがよく遊び疲れて眠ってしまうことがあった。その時に見た小さなジェニーの寝顔は、今ここで眠っているジェニーの寝顔とあまり変わらない。

「どれ、俺が担いで行くか。ダン、お前は自分で歩けるな？」

「うん」

僕はジェニーをアルに託すと、ダグの手を借りて立ち上がった。ジェニーを軽々と抱かかえたアルは、僕らの後ろに座っていた大人の番人達に向かって声を掛けた。

「あんたらは、適当に帰れるな？」

アルの問に、彼らは黙って頷いた。

「よし。じゃ、行くか」

歩き始めたアルに僕らが続いて歩き出そうとした時、大人の番人達のうち、僕らを子供呼ばわりして悪態をついた男性が声を掛けた。
「あ、あのつ。あなた方は……」

彼の声を聴いたダグが一瞬足を止めてチラッと後ろを振り返ったが、声の主が彼だということを確認すると、何も言わずにまた前を向いて早足で歩き始めた。僕はダグの後を追った。

「ダグ……」

僕が小声でダグを呼ぶと、ダグが少し歩くスピードを下げてから、忌々しげに言った。

「俺は、ああいう大人だ子供だっただけで頭ごなしに俺達を役立たず呼ばわりする輩が、大っ嫌いなんだよ」

「それは、わかるけど……」

あの男に「子供かよ」と言われた瞬間、ジェニーもかなり怒っていた。でも、自分の仕事に誇りを持っている彼らなら、何もしないうちからあんな風に言われる事に腹を立てるのは、当たり前のことかもしれない。僕が番人としてのジェニーやダグと関わって、まだ数ヶ月しか経たないけれど、それでも彼らがどれだけ真剣に自分の仕事に取り組んでいるのかは、よく知っている。

「でも、ま」

ダグはそう言いながら僕の肩をガシッと抱いた。

「お前はよくやったよ。年齢も経験値も、まだそんなに無いのにな。やっぱり、オヤジが見込んだだけのことはあるぜ」

「さ、サンキュ」

照れている僕の頭をクシャツと撫でながら、ダグが月の無い夜空を見上げた。

「俺も…。そろそろ考えないとな」

「え？」

「いや。ま、お前には今度話すよ」

「は？」

「ま、気にすんな。お、車だ」

車の側では、黒猫のインキーが僕らを待っていた。

「遅いわよっ」

インキーは不機嫌そうにそう言つと素早くダグの身体に駆け上り、彼の肩の上に座ると手足を払って付いていた雪を落としてダグのジヤケットでそれらを拭った。

「悪いーな。今日は数が多かったからな」

「アタシだって、少しは手伝ってあげたじゃない？」

「おう。ご苦労さん」

「手伝つて…？」

僕が不思議そうに首を傾げていると、ダグの肩の上のインキーが自慢気に胸を張って答えた。

「アタシ、門の探知だけじゃなくて、雑魚だったら多少痛めつけるくらいのことはできるわよ？」

「へえ。やるね」

「でしょ？ これからはあなたも、もうちょっとアタシを丁重に扱うことね」

「うん。そうするよ」

「あら。物分りのいい子って、アタシ好きよ」

ダグが車のドアを開けると、インキーはダグの肩からスルリと降りて、助手席に収まった。

「それにしても、何やってんだ、アル…」

僕らが先に去った後、アルがこの地域の番人達に何かを話していたようだった。

ダグは運転席に座って車のエンジンをかけた。僕は後部席のドアを一旦閉め、外でアルとジェニーを待っていた。

やがて、ジェニーを抱きかかえたアルが大人の番人達を後ろに従えるような形でやって来た。僕が後部座席のドアを開けると、アルは「サンキュ」と言いながらまだ眠っているジェニーを中の座席に横たえた。

「それでは、失礼致します」

番人の一団がアルに向かって会釈をした。

「おう。もう、こんなことにはならねーようにな」

「はい。もちろんです」

番人の一団は、僕らに対して取った態度と全く違う。ちらっと車の中を覗くと、ダグが苛々した様子で番人達の後姿を睨みつけていた。

「じゃあ」

そう言って僕が助手席に乗り込もうとすると、アルが思い出したようにドアを止め、僕の肩越しに車の中に首を突っ込んだ。

「うわっ」

「あ、すまん、ダン。ダグ。お前らどうせ、これから帰るんだろ？俺達もお前んちに寄っていいか？」

ダグはニヤリと微笑みながら答えた。

「いんじゃない？父さんも母さんも、文句は言わねーだろ、どーせ」
「まあな。じゃ、後でな」

アルはそのままフイッと何処かへ行ってしまった。

「ダン。いつまでもそうやってドア開けてると寒いんだよ。とつとと中に入れ。出発するぞ」

「あ、ゴメン！」

僕は助手席に座り、ドアを閉めてシートベルトを着けた。インキーが見計らったように僕の膝の上にやって来て座ると、気持ち良さそうに居眠りを始める。

「よっしゃ、出発！」

車が動き出し森を抜けた頃、ダグが眠気覚ましにハードロックの音楽を掛け始めた。

車がハイウェイに入る頃、僕も好きな曲がスピーカーから流れた。深夜をとくに過ぎたハイウェイには、ほとんど車が見あたらない。少し気だるい身体に、ロックのリズムが心地良かった。

真っ直ぐな道に車を走らせながら、僕らは自然に声を出して歌い始めた。

「イエー！」

「ヤー！」

「うるっさいわね！ 眠れないじゃないのー！」

僕はジェニーの叫び声にびっくりして飛び起きたインキーに、思いつきり腕を爪で引っ掻かれた。

Chapter 2

初めての「大仕事」から帰ってきたその日、僕はジェニーとダグの叔父さんであるアルから、色んな話を聞いた。

アルと彼の仲間達は、番人の世界で「ハンター」と呼ばれる人たちだ。

「ハンター」はその名の通り、狩りをする。しかし、この場合の狩りとは、門から出てしまった魔物の退治を指す。

門の大きさや、万が一開いてしまった時の期間、そして周りの環境によっては、魔物が門からこちら側に出て来てしまい、門を閉める時に押し返されることもなく、この世界に残ってしまうことがある。

今回の場合もそうだ。自力で閉めようとした番人達の力が及ばず、門が開いてから時間が経ってしまったために、多くの魔物が門から出てしまっていた。

ほとんどの場合、門が開いてすぐに出てくるような魔物は雑魚だと言う。下等で知能がそれ程発達していない魔物が「門が開いてる、ラッキー」とばかりに出て来るのだそうだ。高等の、知恵の働く魔物になると、より慎重に周りの状況を観察し、条件が悪い場合は絶対に門の外には出て来ないのだという。

「条件が悪いって…？」

僕の素朴な疑問にも、アルは楽しそうに答えてくれた。

「まあ、ヤツラにも苦手な場所ってあるからな。聖域の近くとか、俺らみたいな人間の近くとか。そういう気配を感じたら、知恵の回るヤツラは例え門が全開していても、絶対に出て来ない。ヤツラだって、自分の命は惜しいからな」

「へえー。だから、今回の魔物は雑魚だって仰ってたんですね？」

「まあな。だが、今回の門は場所的にもかかなりやばかったな。俺が思うに、あと数十分お前らが遅かったら、絶対に大物が出て来てた

ぞ？」

アルの言葉に、僕は生唾をゴクリと飲み込んだ。

「そ、そうなんだ…？」

「ああ。やつらは番人にも敏感だ。力の強い番人が側に来ると、絶対に門の外には出ない。門の中は、ヤツラにとっては安全地帯だからな」

「なるほど」

「で」

僕らの後ろから、ダグが割り込んできた。

「あの、超使えない番人達は、最後に何の用だったんだよ」

「ああ、あいつらね」

アルは少し何かを思い出すようにビールをボトルからグイッと飲むと、「ぶはー」とか言いながら一息ついた。

「俺達は何者かって訊いてきたから、俺は銀狼シルバールフだつて言つて剣の柄を見せてやったら、大人しく黙ったな。ありや、放つて置いたらきつと、自分達が門を閉じたつて上に報告してたかもな」

「ちつ。自分達は腰抜かしてたくせによ」

二人の会話で気になることがあったので、僕は少し遠慮しながらアルに尋ねた。

「あの、すみません。『銀狼シルバールフ』って、なんですか？」

僕の問に、アルとダグは両目を見開きながらキョトンとした顔をした。しまった。この世界では一般常識なのだろうか。

「ああ、すまん。ダンにはまだ、ハンターのことまでは話していないんだ」

僕らの横から、ダグの父であり、僕のお師匠さんであるマイクが声を掛けて来た。それを聴いたアルは「あ、なんだ」と言つてビールを飲むと、僕に説明してくれた。

「俺達ハンターの中でも、力や経験によってはレベルがあつてな。上の方のレベルのハンターは、まとめて『狼』と呼ばれるんだ。狼の中でも力の特色やら仕事のやり方やら、お師匠さんとの絡みやら

何やらと大人の事情が色々あつて……。ま、あれだ。長い話を短くすると、俺は今、『^{シルバーウルフ}銀狼』っていう、ハンターの中じゃ結構上の方の称号を貰ってる。

番人の協会とハンターの組合は繋がりがあつて、定期的に上の連中同士で会合とか開くんだけど、俺はそれに参加する資格を持つてことさ。だりーから、あまり行きたくねーけどな、あの会合」

そう言いながらアルは側の床に置いてあつた自分の剣を手繰り寄せると、僕にその柄を見せてくれた。そこには、毛並みを靡かせながら颯爽と走る銀色の狼が浮き彫りにされていた。

「わあ。銀色の、狼……。カッコいいですね、アルさん」

「アルでいいよ。お前は俺にとっちゃ、ダグやジェニーと同じで甥っ子みたいなもんだ」

「あ、ありがとうございます……」

あまり親戚などの多くない僕にとつて、アルが言ってくれた言葉は、何だかくすぐつたような、暖かいような、何だか変な気持ちでした。でも、それは決して悪いものじゃない。

それからしばらくして少し隅の方にいた僕の横に、ダグが腰を下ろした。

「どうだ？ アル叔父の第一印象は」

ダグの問に、僕は笑いながら答えた。

「とつても面白い人だよな」

僕の答えに、ダグは満足そうに頷いた。

「だろ？ 俺、あの人のこと、小さい頃から憧れてんだ」

「え？ ダグが？」

「なんだよ。悪いかよ？」

「い、イヤ……。意外……。でもないか。何となく似てるよね、ダグとアルって」

「そうだな。似てるかな。二人とも、番人の直系に生まれながら、番人の素質が無いところとか」

「ダグ……」

僕達の間、少しの間沈黙が流れた。すぐ側ではアルや彼の仲間のハンター達が大声で何かを言って笑っているのに、まるでそれが隣の部屋のテレビの音のように聞こえた。

「俺さ、前から悩んでたんだよ」

ダグにしては珍しく小さな声で呟いた。

「俺、番人になるには力が足りなくてさ。家族の中で、俺だけ門が見えないんだ。ひでー話だろ？ だから、俺はハンターになった方がいいんじゃないかって、アルが昔、言ってたんだ。アルはさ、全米飛び回って魔物退治の仕事してて、メチャクチャカッコいい人なんだ。今日俺が持ってたサーベルって、アルのお古でさ。ガキの頃にアルが銀狼に選ばれて今の剣を授かった時、俺にあのサーベルをくれたんだ。俺、スッゲー嬉しかったの、今でも覚えてるよ。」

ハンターって言うのは、やっぱり番人同様に素質も必要だけど、自分の努力次第でいくらでも上に上がれるんだぜ。番人は、お前もわかってると思うけど、天性の素質が命だろ？ それは、どんなに努力しても身につくもんじゃねーからよ。それが出来たら、俺だって今頃、一人前の番人になってるっつーの。

今はとにかく番人の数が足りないし、今日みたいな状況からわかるだろうけど、力のあるうちの家族は時々他のエリアの応援もしてるから、本当に大忙しでさ。そうすると、サポートするヤツもそれなりに必要だろ？ だから、始めはサポートが俺の役目で、それでもいいかって思ってたんだ。でも、お前が番人の修行を始めてから、それは違うと思ったんだ」

真っ直ぐに僕を見つめるダグに、僕は「違うって何だよ？」と冗談っぽく言ったが、ダグはいたって真面目だった。そんな表情のダグを見たのは、ダグと出会ってから初めてのこともかもしれない。

ダグはフツと穏やかに微笑みながら言った。

「俺、お前が来てくれたお陰で、決心が付いたよ。一族の人間でもないお前が番人になろうって毎日頑張ってたのに、一族の人間である俺がウダウダ迷ってたなら、笑いモンだろ？ ライバル心って言う

のとはまたちよつと違うけどな。でも、俺もやりたいことができるんじゃないかって……。ま、頑張ろうな、お互い」

ダグはそう言って僕の肩を叩くと立ち上がり、照れくさそうにキツチンへと行ってしまった。

はつきり言って、それまで僕はダグのことが苦手だった。年上のダグはいつも威張っていて体格も大きくて威圧的だし、僕や他の人間との間には、いつも分厚い壁を作っているような気がした。特に僕がこの家でジェニーの父親から番人になるための修行を受け始めてからは、ダグが僕を目の敵にしているような感情さえ感じていた。でも、そうか。やっと腑に落ちた。

ダグは、違う世界に足を踏み入れた僕のことを気遣ってくれていたんだな。不器用だから本人はそうとは気付いてないと思うけど。ダグもダグなりに、今まで散々悩んできたんだろう。それが今日、番人として働く僕と、ハンターとして働く自分を経験して、それが一番しっくり来るなと思ったんだろう。実際、あんなに生き生きとして、下手すると本来の年齢よりも幼く見えるくらいはしゃいでいたダグの姿を見たことは、彼と出会ってから10年以上の時間の中で一度も無かったと思う。

ダグはその時に、本当のダグを見つけたんじゃないんだろうか。

春になり、ダグは高校卒業を待たずに、アル達ハンターのコミュニケーションが持つ中では最大の修練所があるというニューメキシコに旅立つことになった。

ジェニーの話によると、あの冬の日の翌日、ダグが両親と話をし、その日の晩はアルも交えて夜明けまで話し合っていたらしい。「でもさ、私もダグはハンターの方が似合っていると思うのよねえ」。何ていったって、あのガタイだし、馬鹿力だしさ。アレを生かすのって、ハンター以外、ないんじゃない？」

ジェニーはそんなことを言いながら僕にダグの決断について語ってくれたが、その後にダグ本人から直接聴いた話だと、両親もダグ

はハンターの方が向いているのではと常々思っていたらしく、それとなくアルに色々と打診していたらしい。それでも、番人の家に生まれた子供にとって、番人になれないのは恥だと思う傾向があるとかで、ダグが傷つくんじゃないかと心配した両親は、ダグになかなか言い出せなかったようだ。結局は、それは杞憂に終わって良かったんだけれども。

「俺ってさ、そんなに見た目怖いかね？」

春休み前のある日、オルセン家での修行の合間に庭で休憩していた僕に、ダグがそんなことを言った。

「ぶっ」

「あ、悪い。水が気管に入ったか？」

「げほっげほっ。は、入ったよ…。何も、人が水飲んでる時に、そんな、けほっ。台詞を、言わなくてもいいだろ？」

思いつきりむせていた僕を尻目に、ダグは涼しい顔で言った。

「悪気は…。あつたな、少しは」

「僕が、何をしたって言うんだよ」

「ん？ まあ、俺の妹に手を出そうとしてるとか、してないとか…」
このジョークは、笑えない。

「ダグ。お前、ジェニーに殺されるぞ？」

「い、いや、今はホンのジョーク…」

「お前なんて、門の中に突っ込んでやるっ」

「出来るもんなら、やってみやがれ！」

「ああ、やってやるさ！ いつか。…多分」

気弱になった僕の肩を、ダグがポンポンと軽く叩いた。

「ま、せいぜい修行に励めよ、その日まで…」

「わかってるって。そっちもね。もうすぐなんだろ？ 出発」

「ああ」

僕らは少し青みが出てきた芝生の上に腰を下ろしながら、空を見上げた。白い雲がぼっかりと1つだけ、青い空に浮いていた。

「…寂しくなるな」

僕がポツリとそう言うと、ダグが「意外だ」と言うような顔で僕を見た。

「な、なんだよ……」

「い、いや、お前の口からそんなに殊勝な言葉を聴けるとは……！」

「前言撤回。とつととハンターの修練所に行つて、くたばつて来い！」

そういう僕の腕を、ダグがむんずと掴んだ。

「ダン〜。一緒に行こうぜ〜」

変な声で甘えるダグの台詞に、全身が鳥肌になる。

「断る！」

その頃までに僕らは、ハンターの修行の凄まじさをアルや彼のハンター仲間達から聞いていた。ハンターには身体能力だけでなく、気力、体力も要求される。修練は過酷を極め、修練所に入った人間全員がハンターになれるものではないと言う。そういう状況も踏まえて、ダグの両親とアルはダグにハンターになることを薦めることが出来なかった一面もあった。

始めは「俺はハンターになるのさ！」と意気込んでいたダグも、修行のあれこれの話を聴く度に、その意気込みがすぼんでいった。

「だけど、なるんだろ？ ハンターに。銀狼の甥っ子さん」

「おうよ！ 銀狼なんざ、この俺様が越えてやるぜ！」

出発の日が近付くにつれ、開き直つて元気になったダグが、これ見よがしに胸を張つて答えた。僕はそんなダグの姿をちよつとだけ苦笑しながら立ち上がった。

「ま、頑張つてよ。僕には僕のやるべき事があるしさ」

そう。僕にはここで、やるべきことが沢山ある。番人としての修行もそうだが、来年は大学生になるわけだし。僕はダグのように高校を中退して大学も行かずに修行するなんてことは許されない。何といつても、オルセン家の人々以外は僕が番人になるための修行をしていることなんて、これっぽっちも知りはないのだから。僕の家族でさえも、だ。

エンジニアの僕の父に「僕は魔界の門を閉める人になるために大
学に行きません」なんて言ったら、きつとその場で気絶してしまう
だろう。「男は稼いで何ぼ」が口癖な男だからな、僕の父さんは。

「ところでさ、ダグ」

またもや、素朴な疑問が僕の頭にムクムクと沸いて出た。

「あん？」

「番人やハンターって、どうやって生計立ててるんだ？」

僕の問に、ダグはキョトンとしていた。僕の予想では、この答え
はどうやら番人社会では公然のことらしい。

「あれ？ 知らないのか？ 俺達は一応、国家公務員だぜ？」

「は？」

これは、予想外な答えだ…。

「表向きはどうなんだか知らねーけど。番人の協会も、ハンターの
組合も、国家保安局の管轄だぜ？」

「へ、へえ〜」

「何だよ、その目は。お前、俺の話を信じてないだろう？」

「いや。僕は最近のダグは、ジェニー以上に信じてるよ？」

「…イヤな基準だな。素直に喜べない」

「仕方ないだろ？」

「ま、そうだな…」

僕ら男二人は子供の頃から今まで、どれだけジェニーに騙されて
きたか知らない。それはもう、「お腹が痛い」みたいな小さなもの
から、「。。。ちゃん（学校一の美少女）がダグのこと、好きなんだ
って」という類のものまで、大小様々な嘘で広く浅く（時々深く）、
僕らの心に傷を負わせてきた。

ちなみに、ダグは美少女の件に至っては、しばらくの間かなり勘
違いした行動を取って相手をドン引きさせ、その後、好き情報がジ
エニーの嘘だったことが発覚して、シヨックの余り1週間ほど学校
に出てこなかった。ジェニーは知らなかったらしいのだが、実はダ
グはその子のことが好きだったらしい。それを知ったジェニーは珍

しく素直にダグに謝まり、さらにダグの好きなビデオゲームの最新版を買ってダグに贈ることで、ようやく機嫌を直してもらったのだそう。

ジェニーは僕にはそこまで酷い嘘を吐いた事はないが、それでも昔はちよくちよく色んな小細工をしてきたものだ。そんなことを思い出し、僕はあることにふと気付いた。

「そう言えば、最近は無いな」

僕がポツリと言った言葉を、ダグは聞き逃さなかった。

「何が？」

「ジェニーの、いたずら」

「そうか？ 俺にはまだ、ちよくちよく色んな小細工仕掛けてきやがるぞ？ 最近だと、先々週の日曜の朝に『早く起きないと朝練に間に合わなくなるぞ』って叩き起こされてよ。ま、月曜と勘違いして飛び起きてグラウンドに行ったら誰もいなかったって、定番のオチなんだけどな」

「プツ。い、行ったんだ…。しかも、グラウンドまで…」

僕は笑いを堪えようとしたけれど、無理だった。

「う、うるせー！ その日は遅くまで映画観てたんだ。仕方ねーだろ！」

「でも、行ったんだ、グラウンド…。いつ、騙されたって気付いたんだよ？」

「…近所のおばさんが犬連れて散歩しながら『あら、日曜なのに一人で熱心ね』って言ったんだ」

「アハハハハ」

「笑うな！ いつか俺があいつを騙し通してやるっ」

「無理だよ、ダグには…」

僕の言葉に、残念そうにダグがうな垂れた。

「…俺も、そう思う。はあ」

大きなガタイで肩を落とすダグは、何だか大きなクマのヌイグルミのようだ。でも、それを言ったら思いっきり羽交い絞めに遭うだ

ろうから、僕は絶対に言わない。ふざけているとわかっていても、ダグの羽交い絞めは本気で痛い。

しばらく二人で無言で外を眺めていると、家の中からジェニーの声がした。

「あ、ここにいたのね？ あれ？ ダグも一緒？ 最近、よく二人で一緒にいるんだね」

「まあな。男同士の話もあるんだよ」

「何それ。やーらしー」

ダグをからかいながらクスクスと笑うジェニーは相変わらずだ。だが、今日のジェニーはダグに羽交い絞めにされながら、少し寂しそうな顔をした。

「…ジェニー？ 悪い。痛かったか？」

「ううん。そうじゃなくて…。もうすぐだなんて、思っただけ」

そう。もうすぐ。もうすぐダグは、ここからいなくなる。

「遠くったって、休みには会えるだろ、きっと」

「うん、でも…。やつぱり、デカイのがいなくなると、スペースが余るっていうか…」

「るせつ！ このっ！」

「きやあー」

二人はそのままはしゃぎながらじゃれ合っていた。

本当に仲が良いんだよな。この家族は。

それから数日たって学校が春休みに入り、ダグが旅立つ日になった。

僕は迎えに来たアルが運転する車に、ダグの少ない荷物を詰め込むのを手伝った。

「本当に、これだけしか持って行かないの？」

アルのSUVの後部座席はスリッパだ。実際、ダグは必要最低限の着替えぐらいしか持って行かないらしい。

「これだけありや、十分だろ。遊びに行くんじゃないんだ」

胸を張って答えるダグを見ながら、ジェニーが横からニヤツと笑いながら言う。

「って、アル叔父さんにタベ言われて、慌てて荷物を減らしたのよね。」

「るせつ！ ジェニー。黙ってるっ！」

羽交い絞めに遭いながら僕に助けを求めるジェニーから視線を動かすと、車から少し離れたところで何やら話しているジェニーの両親とアルを見つけた。

「もう！ ダンってば、ちつとも助けてくれないんだから！」

ダグから逃れたジェニーが僕の腕を掴んだ。

「だって、しばらくの間、ダグから羽交い絞めされなくなるだろ？」

僕の言葉に、珍しくジェニーが素直に答えた。

「…そうね」

「おいおい。俺はいつでもお前達を羽交い絞めにしてやるぜえ？」
後ろからおどけながらやって来るダグを見て、ジェニーが真顔で言った。

「ダグ」

「お、おう」

いつに無く真剣なジェニーの表情に、辺りに緊張感が走った。ジェニーは口を少し開くと、1つ深呼吸をしてからダグに言った。

「絶対に、また、生きて会おうね？」

ダグはその言葉を真面目な顔で受け止めながら頷くと、微笑まずに言った。

「…わかってる」

この国は平和だ。それなりに気をつければ安全に暮らせる世界だ。でも、僕らのいる番人とハンターの世界は、仕事に常に危険が伴う。ジェニーの父親から最初の手ほどきを受けた時に何度も言われたことが「少しでも無理だと思ったらそう言え」だった。無理を通せば、それだけ危険も大きくなる。危険が大きくなればそれだけ、

命を落とす確率が高くなる。自分の力を知り、相手の力を見極め、それに応じた作業を的確に行なう。それが生き残る唯一の方法だと。

僕ら番人に比べ、アル達ハンターの方が危険と向かい合わせになる確率が高い。常に魔界と繋がる門と向き合う僕らの方が危険だと思われがちだけれど、門から魔物が出ることは稀だ。魔物の気配や力を感じることがあっても、彼らが門から出ることは滅多に無い。

門を閉じようとする番人が門と向かい合っているなら、尚更だ。彼らだって、自分の命は惜しい。僕ら番人が扉を閉める時の術に干渉すると、魔物は体力的に多大なダメージを被るらしい。だから、知能の高い魔物は番人が門の近くにいたときは絶対に門の中から動かない。その代わり、番人が術を失敗すると、ヤツらは途端に門から飛び出してくる恐れがある。だから、僕達は失敗することが許されない。何故なら、それは死を意味することになるからだ。

一方で、ハンターは既に「出てしまった」魔物を相手にする。魔物はこちらに在る時間が長くなればなるほど、そして門から遠ざかれば遠ざかるほど己の理性を失う確率が高くなるんだそうだ。

理性を失った魔物と対峙する。それはどんなに恐ろしいことだろう。

だからハンター社会は実力主義だ。力の強い、経験のあるハンターが上に行く。毎年多くの若者が修練所を訪れ、その中の何割かがハンターになり、その中の何人かが毎年命を落とす。

彼らの出番が少なくなるよう、番人達は門の気配に神経を研ぎ澄ませる。それでも、開いてしまう門はどうしても現れる。

番人とハンター。僕らの役目は違うけれど、目的は同じ。人々を、魔界の恐怖から遠ざける。

僕らは生き残るために鍛錬を重ねる。僕らだって、魔物のいない安全な世界の中で、笑顔で幸せに暮らしたいから。

しばらくして、ジェニーの両親との話が終わったアルがダグに声を掛けた。

「そろそろ行くぞ」

「あ、ああ」

いつものように飄々と車に乗り込むアルに比べ、ダグは少し緊張した面持ちで返事をした。いつのまにかダグの傍ら立っていた両親や祖母とダグが抱き合い、別れのキスを交わす。

「ダグ。またね」

ジェニーがダグに抱きつくと、ダグが大きな手でジェニーの背中を数回ポンポンと叩いた。

「お前も、あんまりダンにワガママ言わねーよーにな。ほどほどにしておかねーと、ダンが呆れて他の女のところに行くぞ?」

「う、うるさいわねっ」

膨れっ面のジェニーがダグから離れると、僕はダグと右手でガツシリと握手を交わし、ダグが僕の左肩を叩いた。

「ジェニーを頼む」

「ああ」

ダグはニヤリと笑うと僕の手を放し、生まれ育った家を振り仰ぐと、この場所の名残を惜しむように深呼吸をした。

「じゃ、行くわ。皆、またな」

「気をつけて」

「またね!」

ダグが車に乗り込んでドアを閉めると、車が滑るように動き始めた。ダグは窓を開けると、泣きそうな顔で笑顔を作り、僕らに手を振った。

やがて車が加速して走り出し、角を曲がるとあっという間に見えなくなった。

「ダグ、今頃絶対に泣いてるね」

そう言うジェニーの目にもうつすらと涙が出ていたけれど、僕はあえてそこには突っ込まなかった。

「でも、来年は私達の番だね」

ジェニーがそう言いながら自分の家を見上げた。

「私達も、来年はここを出るんだよね…」
そうだ。

来年の秋には、僕らは大学入学と同時に、この街を出る。

番人にはハンターのような修練所は無い。

けれど、番人の子供が大学に進学する場合、修行も兼ねて番人の一族の息の掛かった大学に行き、そこで大学に通う四年間、勉強しながらその土地の番人達から修行を受けたり、仕事をしたりする。その四年間で、その後の番人としての派遣先が決まるから、重要な四年なのだという。

僕とジェニーの進学先は、そんな大学の中から選ばれる。とはいえ、どの大学もそれなりのレベルの大学なので、僕らは勉強も怠らない。

日課の修練の合間に勉強をしながら、ジェニーが愚痴をこぼした。「面倒よねえ…。あつさり裏口で入学させてくれりゃあいいのに」「それで入った後にあからさまに成績が悪かったら、すぐバレルだろ？」

「あ、そっか」

春休みの間、僕はほとんどの時間をジェニーの家で過ごした。

まず、自分の家で目覚めてからランニング。ランニングの途中でジェニーの家の前からジェニーが合流して、二人でそのままマイル位の距離を走って、一旦それぞれの自宅に戻る。

家でシャワーを浴びてから朝食を採り、ジェニーの家に向かう。

ジェニーの家で日課の修練をジェニーと一緒に行なうから二人で勉強。ランチはジェニーの家でご馳走になって、午後はまた修練かジムに行って筋力作りをしてからスイミング。夕方は、仕事があれば家に遅くなる連絡を入れてから仕事に向かい、仕事が無ければそのまま家に戻る。

人間、時間が無ければ無いに効率よく動くこととするもので、僕らは多忙な割には充実した日々を送っていた。

僕は元々ジェニーの家に遊びに行くことが多かったから、その延長戦のような気分だったのだけれど、オルセン家の人々にとっては、ダグがいなくなった家の中に僕がいて、少しは寂しさが薄れたらしい。とは言っても、その時の僕はそんなことには全く気付かなかったのだけど。

春休みの最終日、その日は折りしも新月だった。

いつものようにジェニーの家の門探知猫、黒猫のインキーと灰色猫のスモーキーが緩んだ門の気配を感じて僕らに知らせた。

「では、私はここへ。母さんはここ。ジェニーとダンはこちらへ」
リビングのテーブルにいつものように地図を広げながら、ジェニーの父が指示を出した。向かう場所はそれぞれの能力に応じて的確に与えられる。

僕らは町外れの墓地の横にある森にやってきた。幸い、門はまだ緩んでいる程度で、それ程大きくは開いていない。

「これなら、今日はソロでも大丈夫そうね」

「じゃあ…」

ジェニーがやるのか、と思っていたら、ジェニーがニヤリと微笑んで僕の背中を前へと突き飛ばした。

「ダンのソロに決まってるじゃない」

「ぼ、僕っ？」

「あら。私、私がやるなんて一言も言っていないけど？」

ジェニーはそう言うのと、近くにあった大きな石の上に腰掛けた。

「出来るでしょ？ もう、力のコントロールの仕方とか、理解できてるはずよ？」

「…わかったよ」

僕は門の前へと足を踏み出した。生ぬるい空気がゆるゆると門の隙間から流れ出している。

（魔界の、臭い…）

この数ヶ月で大分慣れたとはいえ、まだこの特殊な臭いは好きに

なれない。いや、魔界の臭いを好きになったりしたら、それはそれで問題だけれど…。

僕は門を睨みつけ、門を閉じ始めた。

生まれて初めて、一人で。僕だけの力で。

一人の、門の番人として―。

- - - - -

短い春休みが終わって、学校がまた始まった。

たった2週間くらいのはずなのに、何かが違う。私の周りは、春休み前よりもざわついている。それが私にはどこか不愉快で仕方が無い。

一人でいる時はそれほどじゃないのに、ダンと二人でいつものようにカフェテリアでランチを食べたり、図書館で勉強したり、二人で校内をあるいていたりすると、周りがざわつく。

(前もこんなだったっけ?)

考えてもよくわからない。それなら気にすることもないかと思っていた矢先、私は思いがけずにその理由を知ることになった。

「ねえ、ジェニー。あんた達、どうなってるの?」

私は教室で帰り支度をしている最中に声を掛けられた。

その日は、私は珍しく一人だった。いつも一緒にいるダン先生に用事を頼まれて、始めは誰もいない静かな教室で本を読みながら待っていたんだけど、そのうちそれがいつ終わるかわからないから先に帰れと言われてしまった。成績優秀なダンがよく先生に色々手伝わされることが多いから、こういうことはよくあることなんだけど。

「どうって、何が…?」

私が顔を上げて声の主の顔を見ると、彼女、エマは困ったような顔をした。

エマは私と同年で、親友というわけではないが、小学校の時から何故か腐れ縁で同じクラスになっている。普段、人付き合いが苦手で人との距離を置いている私にも、エマは遠慮無く色んな世話を焼いてくれる、お母さんみたいな人だ。

エマは私を手招きすると、近付いた私の耳元でこう言った。

「あんだと、ダンのこと」

「は？」

私が首を傾げると、エマはニヤリと笑いながら側の机の上に腰掛けた。

「最近さ、なーんかダンが男っぽくなってきたてカッコいいって、女の子の間で評判だよ？ でも皆、いつもあんだがダンの側にいるから近付けないんだってさ。ま、そこの女の子じゃ、あんだ相手じゃ見劣りするからね」

「何、それ…」

困惑しながら頭の中で状況を整理してみる。

女の子達が、ダンの噂してる…？ 私がいるから近付けない？

じゃ、私がいなかったら、ダンに近付いて、で、それで、それで…？

「それで、どうするの？」

私が不意に漏らした言葉に、エマが怪訝そうに眉をしかめた。

「は？ どうするって…。それはアタシが訊いてるんじゃない？」

「あ、そうか。でも、エマ。女の子達はダンに近付いて、何がしたいの？」

「何がって…。そりゃあ、ナニがしたいんだろうね」

「ナニって、何？」

私の質問に一瞬両目を「嘘だろ？」と言わんばかりに見開いたエマが、ケラケラと声を上げて笑い出した。

「やだ。あんだ、そんなこともわかんないの？ もう17になるでしょ、アタシ達？」

「え…？」

「だからさー。手を繋いだり、ハグしたり、キスしたり、抱き合っ

たりしたいってことじゃない」

女の子達が、手を繋いだり、ハグしたり、キスしたり、抱き合ったりしたいの…？ ダンと？！

「抱き…。え？ え、えええ！」

突然大声を上げた私に、エマが驚いて腰掛けていた机から落ちそうになった。

「ジエ、ジエニー…。声、大きいって…」

「ご、ごめん、エマ…。あまりのことに、ちょっと驚いただけ。だ、だって…。ダンと…」

頭の中がグルグルする。何をこれからどう考えて良いのか、全くわからない。

そんな私をよそ目に、エマは両腕を胸の前で組みながら溜息を吐いた。

「なーんだ。あんた達、付き合ってるんじゃないの？」

エマの言葉に、私は首をブンブンと勢いよく横に振った。

「ダンとはその、仲間って言うか、家族って言うか…」

「へえ。あんたにとっては、ダンはダグと同系列なわけね？」

「ダグと同じ…？ そう言われると、何となく違和感があるような…。」

「えっと…」

私が答えられずにいると、エマは「ふーん」と言いながら机の上から腰を上げた。

「ま、いいわ。アタシはちゃんと、教えてあげたからね？」

せいぜい頑張りなと言ってひらひらと手を振りながら、エマは去っていった。

「頑張れって、何を？」

私はしばらくの間、呆然としたまま教室の中で一人、突っ立っていた。

Chapter 3

最近、ジェニーがどうも変だ。

いや、ジェニーが変なヤツなのは子供の頃からよくわかってる。でも、そうじゃなくて、態度というか、行動というか…。上手く説明できないけど、何かが変だ。

この間の週末、僕がジェニーと一緒に日課のランニングに出た後、そのままジェニーのお母さんであるローラの厚意に甘えて朝食をこ馳走になる事になった。

暖かくなってきた外が気持ち良かったから、僕はしばらくジェニーの家の庭で腕立てや腹筋をやったり、ストレッチをしたりしていた。若い芝生の青い臭いが気持ち良かった。

一通り終わると、僕は庭先にある水道口から水を出して、そこで顔と頭を軽く洗った。いつもなら、それが終わる頃にシャワーを浴び終わったジェニーが降りて来て、タイミングよく僕にタオルを出してくれたりするんだけど、その日はどういうわけか、ジェニーがタオルを胸の前で握り締めたまま、ボーっと突っ立って動かなかった。

「ジェニー、タオル」

ジェニーは僕の方を見たまま、動かない。

「ジェニー？ おーい」

目の前で手を振ると、ジェニーは一瞬ハツとして、それから俯きながらタオルを僕の方に差し出した。

「あ？ あ…。あ！ ゴ、ゴメン！ はい、これ！」

「…サンキュ」

僕がタオルで顔や頭を拭いている間、ジェニーはボーッと僕の方を見ていた。風邪でも引いたのかなと思っている時に、遠くからジェニーのお母さんのローラが声を掛けてきた。

「ダン？ 今日は暖かいから、汗も随分掻いてるんじゃない？ ダ

グので悪いんだけど、このＴシャツに着替えたなら？」

そう言いながら、ローラはダグが置いて行ったＴシャツを一枚、テラスにある椅子の上に掛けた。

「ありがとうございます」

「朝食、もう用意できてるから。中に入って二人で食べなさい？」

「はい。すぐに行きます」

ローラは僕らに手を振ると家の中に戻っていった。僕はテラスに向かつて歩きながら、着ていた汗で身体に張り付いているＴシャツを脱いだ。すると、後ろのほうから変な声がした。

「ひ、ひやああ！」

「へ？」

変な声のした方を振り向くと、ジェニーがあたふたと顔を手で隠そうとしていた。

「…何やってんの？」

「や、ちよつ、あのつ。振り向くの、反則！ し、しかも、その格好でこつちに来ないで〜！」

「え？」

この格好だったって、別に全裸じゃないし（下着とジョギングパンツは履いたままだ）。何が悪いんだか、僕にはさっぱりわからない。ジェニーは、しまいには地面の上にしゃがみ込んだ。まるで、かくれんぼをしている子供みたいだ。

「ジェニー。本当に、大丈夫？」

「だ、だ、大丈夫！ 大丈夫だから、早くあっち行ってシャツを着なさいよっ」

「え？ あ、うん」

僕はテラスに行くと、ローラが用意してくれたダグのＴシャツを着た。ＬサイズのダグのＴシャツは、僕には少しブカブカだ。だけど、最近、筋トレをやっている影響もあって、昔ほどズルズルになっっている感じはしない。そう言えば、最近、自分の持つてる服が少しきつくなってきたかな。次に仕事の収入が入った時に、新しい服

を買いに行った方がいいかもしれない。そう言えば、前にジェニーが僕の着ている服が似合っていないだの、形が変だの、散々文句を言っていたっけ。

「ジェニー、今度さ」

「ん？」

ジェニーは僕をちらつと上目遣いで見ると、服を着たのを確認したのか、ほっと安堵の息を漏らしてから立ち上がり、僕の方へと歩いてきた。

「何か言った？」

「うん。今度、次の入金の後、買い物に付き合ってくれないかな？」

「買い物？」

「うん。最近、服が少しくつくなってきたみたいなんだ。それで、新しい夏服を何着か買おうかと思って。一緒に行ってくれる？」

「あ、うん。いいよ。でも、何で？」

「だって、僕が自分で選んだ服って、いつもジェニーには不評だからさ。それなら、ジェニーに僕の服を選ぶの、手伝ってもらおうと思うって」

僕がそう言うと、いつもなら「全く、仕方ないなあ」とか「面倒臭い」とか偉そうに言うジェニーが、どういうわけか、はにかみながら笑顔で「わかった」としおらしく言った。

…調子が狂う。

「ほら、早くキッチンに行こ？ 食事が冷めちゃうよ」

何故だか上機嫌なジェニーが、僕の腕を引っ張りながら扉に向かう。

「あ、うん…」

僕はジェニーに腕を引かれながら、家に入った。

やっぱり最近、ジェニーが変だ。

五月に入って、学校も残すところ、あと一月とちょっと。夏が近付いてきている。

毎年、この時期になるとサマーキャンプの話題やバイトの話で持ちきりだけど、今年はそうも言っていられない。この夏は、来年卒業後の進路を決める大事な時期だ。

「ダン！ ダンはどこの大学のキャンパスツアーに参加するの？」

私はこのこと、ここにも行くんだけど、もしダンも行くなら、一緒に行かない？」

「あら、あなたとダンじゃ、成績が全然違うじゃない。ダンはもつと上の大学を狙っているんでしょう？ 私と一緒に、ここの大学のキャンパスツアーに参加しない？」

「何よ。あんたの成績だって、ここは無理じゃない！」

「うるさいわねっ！」

ギャンギャン、キー、キー、キー……。

女って、どうしてこう、自分以外の人間について、まるで自分のことのように熱く語れるんだ……？ 大体、どうして最近、僕の周りにはこうも煩いギャラリーが行く先々に付いて回るんだろう。前みたいに、空気のように放っておいてくれた方が、よっぽど楽だ。なのに僕が一体何をしたって言うんだ……？

僕がウンザリしながら辺りを見回していると、丁度廊下の向こう側にジェニーの姿が見えた。ジェニーは女の子達に囲まれている僕の姿を見るなり不機嫌そうな顔をして、その場に仁王立ちになった。まずい。

「あのさ。悪いけど、僕、そろそろ行くね。じゃ、また！」

女の子の垣根を押し分けてジェニーの方に向かおうとすると、その先にまるで待ち構えていたかのように、一人の女子が立っていた。確か、彼女は1学年上だったと思う。

「ハ―イ、ダン。あなたに、お願いがあるんだけどあ―」

アイスクリームにハチミツをかけてこね回したような声で、その子は僕に話し掛けてきた。はつきり言って、この手のタイプは苦手だ。

僕はしかめっ面になりそうな顔を無理矢理平静に保って、出来う

る限り穏やかに言った。

「何？」

彼女と、彼女の後ろで様子を見ている友人達が「きゃあ」とか言いながら身体をくねらせた。何なんだ。

彼女はマスカラがこつてり付いた睫毛をバシバシと上下させながら、上目遣いで僕を見ながら口を開いた。

「私のお、プロムのパートナーに、なつてくだらないかしらあ？」
目の前で不気味なほどフェロモンと安い香水を撒き散らしているその子に、悪気は無いけど僕は吐き気を感じた。嫌な過去が頭の中に這い出しそうになって、慌ててそれを押し込める。

プロムのパーティー会場の入口で、今よりも派手に着飾った目の前の彼女と、スーツを着た僕が花のアーチの下で並んで写真を撮っている図を想像しようとした。だけど。

…ありえない。

「ごめん。無理！」

それだけ言つて、僕は逃げるように走り出した。

「ちよつ！ 何それ、早！」

「待ちなさいよ、ダン・ウィーザー！」

僕が走り出すのを見て、ジェニーは先行して学校の駐車場に向かって走り出した。ジェニーはリモートで車のロックを解除すると、するりと運転席に滑り込んでエンジンをかけた。

僕がジェニーの車に滑り込むと同時に、車が動き出した。バックミラーの中に、追いかけてきた数人の女の子達が遠くで息を切らせている様子が映っていた。

「サンキュ、ジェニー。助かった…。はあ…」

「相変わらず、女の子達に囲まれて楽しそうね、ダン」

冷ややかに言い放つジェニーに少しムツとしながら、僕は答えた。
「誰かさんが、ちつとも助けてくれないからね」

「あら。それは勘弁願いたいわ。あの中に飛び込むくらいなら、魔物の群れに突っ込んだ方がまだマシよ」

「僕だって、門と対峙してる方が、彼女達に対峙してる時よりよっぽど楽なんだけどね」

僕の台詞に、ジェニーがプツと噴き出した。

「なるほどね。言うようになったわね。見習い番人さん♪」

「うるさいな。僕だって、すぐに一人前になってやるさ」

もうすぐ、僕は一人前の正規の番人として認められるために、協会が定める検定試験を受けることになっている。それに合格すれば僕は番人として協会に正式登録され、仕事に応じて給料が支給される。(今は見習いだから正式な給料は出ないけど、仕事に応じてマイクとローラが僕に小遣いをくれている。)そして、この夏に行なわれる奨学金の選抜試験に合格すれば、大学にも協会の援助を受けながら行くことが出来る。こんな好条件に恵まれるなんて、思ってもいなかった。まあ、まずは番人の検定試験に合格しないことには、全てが水の泡なんだけど。

信号待ちの間、黙り込んでいる僕をチラツと見て、ジェニーが言った。

「大丈夫よ。ダンならきつと、合格するって。私だって合格したんだし」

「ちなみにそれは、何歳の時？」

「えーっと…。確か、十歳とか、その辺かなあ？」

そう答えてから、ジェニーは慌てて言葉を足した。

「あ！ あ、でも、でもね。私はその前に何年も父さんと母さんのサポートしてたし、生まれてからずっと基礎を叩き込まれてたから、信号が青に変わった。見慣れた景色が流れていく。」

「でも、一族の人間ですら、落ちる人もいるって聞いたけど？」

「それはまあ、素質とやる気の問題ね。いくら番人の家に生まれたからって、ちゃんと修練を積まないと門は閉められないもの。修練無しで閉められるんなら、そこの赤ん坊にだって閉められるはずでしょ？」

ジェニーの励ましてるんだか何だかわからない返答に苦笑してい

ると、不意にダグの顔が頭に浮かんだ。

「…ダグは、随分悩んでたみたいだよ？」

僕が独り言のように言った言葉に、ジェニーが真面目な顔で答えた。

「知ってる」

しばらくの間、車の中に沈黙が流れた。

同じ両親から生まれたのに、ダグは門が見えないために番人の素質無しとされて、自分の居場所を探していた。その先に見つけたのが、門から出てしまった魔物を倒すハンターという役割だ。

「ダグ、元気にしてるかな」

ポツリと僕が小さく呟いた言葉を、ジェニーはちゃんと聞いていた。

「この間、『身体中が筋肉痛で動けねー』って情けないメールが入ってた」

「プツ。ダグらしいね」

「そうね。でも、何だか楽しそうだから安心した」

「うん」

車は住宅街を抜け、周りに森しか見えない道を走って行く。

僕らが住むのは町の外れで、辺りにはジェニーの家と僕の家しかないような所だ。「近所」とは言っても、ジェニーの家と僕の家の間は少し離れている。元々は農家の持ち家だった僕の家がそんな場所にあるのは理解できるが、ジェニーの家が何故そんな場所にあるのかは、最近まで全く理解できなかった。

「ダン。最近、大丈夫なの？」

僕の家が見えてきた頃、ジェニーが僕に尋ねた。

「…うん」

「そう」

ジェニーが車を僕の家の前に停めると、僕は車から降りた。玄関の横のドライブウェイには、見たことの無い古い小型のピックアップトラックが停まっていた。誰のかなんて、どうでもいい。

「ダン」

ジェニーが控え目に呼ぶ声が聴こえて、僕は振り返った。そこには、僕を心配そうな顔で見つめるジェニーがいた。僕は無理矢理、笑顔を作る。

「大丈夫だよ。慣れてるし」

僕が自嘲気味にそう言うと、ジェニーが「そうじゃなくて」と言いながら首を軽く横に振った。ジェニーが僕を心配しているのは、僕はよく知っている。ジェニーの家族は皆、ここがどういう家なのかを知っているから。

ジェニーは縋るような目をして、僕に言った。

「ダン。今日も、後でうちに来るでしょ？」

「うん」

僕の返事に、ジェニーは安堵の息を漏らしながら微笑んだ。

「じゃ、あとで」

僕がジェニーに頷くと、ジェニーの車は静かに動き出し、去って行った。

何年も手入れのされていない僕の家は壁の塗装が剥げ、所々下の木の色が見えてしまっている。最近では二階で雨漏りもするって父親には告げているんだけど、いつも「また今度な」という答えが返ってくるだけだ。一応自分で応急処置はしたけど、それがいつまで持つかはわからない。テラスは木の床の浸食が激しくて、危ないから誰も使っていない。あと数年経てば、この家は崩れるんじゃないだろうかと思う。

（その前に、出てってやるさ）

僕は立て付けの悪いドアを何とかこじ開けて中に入った。

この家に人がいることは滅多に無い。父親はどうせ帰ってこない。以前は義母と妹がいたが、二年前に義母は妹を連れて出て行った。僕の三つ上の姉は、コロコロと顔と名前の変わる「彼」のところに入り浸ったまま帰って来ないことの方が多い。今日は珍しく、表に

停まっている車の持主と一緒に来ているみたいだけれど。

色褪せたカーテンが引かれたままの薄暗いリビングの中を横切つて、僕の部屋がある二階へと向かう階段に差し掛かった。二階には、階段のすぐ横に姉の部屋があり、続いて僕の部屋、そして突き当たり父の寝室がある。薄暗い中、電気も付けずにそのまま階段を昇る。ギイと低い音を立てて軋む階段を昇っていくと、次第にそれ以外の何かが軋む音と、男女の喘ぎ声が聴こえてきた。

（全く。平日の昼間っから、何やってんだか…）

残念ながら、こんなことでうるたえるほど、純情に育つような環境に僕はいなかった。僕の姉は良くも悪くも男好きするタイプらしい。特に義母が出て行つてからは、ブレーキの利かなくなつた暴走車のような。僕がいてもお構い無しにリビングやキッチンで男と抱き合っていたりする。時にはまるで、僕にわざと見せ付けるようにそんなことをしなくても、僕は僕らの実母の姿を忘れたりしていない。

僕は自分の部屋に入ると、手早くバックの中を整理した。明日必要なもの、今日出された課題に必要なもの、明日の着替えや何かを全てバックに詰め込んだ。姉が今日ここにいないなら、僕は今夜は戻らない。ジェニーの両親に頼んで、今夜はダグの部屋に停めてもらおう。

僕は重たくなつたバックを担いで玄関に向かった。足音なんて気にしない。どうせ姉達には聴こえちゃいないだろう。大体、僕の足音よりも、彼らの声の方がよっぽどうるさい。

立て付けの悪いドアを開けて、無理矢理閉めた。鍵なんて掛けない。こんな家に盗みに入る泥棒がいたら、すぐマヌケだ。ここには盗めるものなんて、何も無い。全ての電化製品は10年以上古いものだし、貴金属なんて何も無い。

僕は壁に立て掛けてあつた自転車に跨ると、ジェニーの家に向かって走り出した。

僕の家からジェニーの家まで間には、昔はトウモロコシなどを育てる畑があつたらしいが、今では雑草が生い茂る野原が広がる。そのすぐ後ろには森が広がり、その中にジェニーの家がある。

僕がまだ小さな子供でここに引越して来てすぐの頃は、森は暗くて大きくて、まるで巨大なモンスターのようで怖くて近寄れなかった。そこが暖かな、安らぐ場所へと変わっていったのは、いつの頃からだったろう…。

そんなことを思いながら自転車を漕ぐうちに、僕はジェニーの家に到着した。僕の家と違って、ジェニーの家族が住む家はきちんと手入れの行き届いた、明るくて綺麗な場所だ。ここに来ると何故か、僕はいつも安心する。

僕は自転車をテラスの横に立て掛けると、玄関に回ってベルを押した。すぐにジェニーがやって来て、ドアを開けてくれた。

「早かったのね…って、何それ。スゴイ荷物ね」

「うん」

僕がジェニーの横をすり抜けて家の中に入ると、足元にこの家の2匹の猫、インキーとスモーキーが僕の足元に擦り寄って挨拶をしてくれた。

「あ。やっぱり、いたんだ？」

ジェニーが遠慮がちに小声で尋ねた。

「うん。だから、今夜はダグの部屋に泊めてくれるとありがたいんだけど」

僕の言葉に、ジェニーが頷いた。

「大丈夫でしょ？ どうせなら、月曜の朝まで泊まっていけば？ 明日から週末なんだし」

僕らはとりあえずリビングに向かった。

「ねえ、母さん。今晚から週末の間、ダンがダグの部屋に泊まってもいいでしょ？」

ジェニーがリビングの奥に続くキッチンにいるらしいローラに話し掛けると、「もちろんよ」と明るく答えるローラの声が返ってきた。

た。

僕は荷物をリビングの隅に置くと、キッチンに向かった。ローラはオーブンを使って何かのお菓子を焼いているらしく、そこら中に甘い匂いが漂っている。子供の頃から、この時間にここに来ると、いつもお菓子の匂いがする。

「我儂言って、すみません」

僕がそう言って頭を下げると、ローラがニツコリと微笑みながら僕に優しくハグとキスをくれた。

「遠慮すること無いわ。それに、今ではあなたは私達の仲間でもあるのだから。自分の部屋だと思って、ダグの部屋を好きに使ってもらって構わないわ。ダグだって、この家を出る時にそう言っていたでしょう?」

「そうですけど…」

ダグが旅立つ時、彼は僕に自分の部屋をいつでも使ってくれていからと言って、僕に部屋の鍵までくれた。でも、その鍵を使うことはあまり無いだろうなと思って、僕は冗談半分に鍵を受け取っていた。

「うちのことは心配しなくていいのよ? 昔はうちもあなたに知られてはいけない部分があったから、距離を置かざるをえなかったけれど、今は違うのだし」

「はい。ありがとうございます」

僕が再び頭を下げてから顔を上げると、ローラが微笑みながら僕の両頬を両手で包み込んだ。相変わらず、ローラの手はふんわりと暖かい。

「ダン。いいこと? 前にも言ったと思うけど、あなたが門の番人になると決めた日から、あなたは私達の家族と同じよ?」

ジェニーと同じ青い瞳が、僕を真っ直ぐに見つめていた。僕が頷くと、ローラは安心したように微笑んだ。

- - - - -

- - -

僕が門の番人になろうと決心したのは、そこに僕にとっての自由があると感じたから。

僕が「門」を見ることが出来ることを知ったジェニーの家族は、僕に門の番人になることを勧めた。番人になれる素質を持つ人間が少ない上に、現在、番人の絶対数が不足していることが原因だったのだけど、僕は始めは番人になる気なんて、毛頭無かった。大体、僕はその時、まだ自分がハロウインの日に見たり感じたりしたことが現実のものだなんて、納得できていなかった。

それをあつさりと覆したのは、ジェニーの父であるマイクが言った言葉だった。

「ダン。君が番人になれば、仕事に応じて支払いが出る。つまり、君は仕事を持つということになるんだ。さらに、君の能力がある程度認められれば、協会のサポートを受けて大学に行くことだって出来る。言うなれば、君は君の力で生きていくことが出来るようになるんだ」

収入を得られれば、あの家を出ることが出来る。その上、半ば諦めかけていた大学への道も開ける。それまでも奨学金を貰うことを考えてはいたけれど、僕が門の番人になれば、そのチャンスが確実に広がる。

そんな理由で決めたなんて、打算的だなと思う。でも、僕が僕の力で生きていくことが出来るというのは、僕にとってはかなり魅力的な話だ。

ただ、やっぱり現実はそんなに甘くはない。

大学へのサポートを受けられるのは将来有望とみなされる番人のみだと言うことなので、僕はまず、番人として認められるためにメイクとジェニーの下で猛特訓を始めた。

体力作り、門の基礎知識、番人の基礎訓練や彼らにまつわる歴史。様々なことをジェニーの家族に教わってきた。そして、ラッキーな

ことに、冬に起こった巨大な門の一件で僕の道はさらに開けた。

あの一件から数日後、僕はマイクとローラから呼び出された。僕が彼らの家に行くと、一通の手紙を渡された。ご大層なエンブレムの入った封筒には、ご大層なエンブレムの入った便箋が入っていて、その中には「マイクとローラ・オルセン預かりの番人見習い、ダン・ウィーザーを本協会の大学奨学生候補とし、本年度夏に実施される選抜試験の受験資格を与えるものとする」と書かれていた。

「これって…。どういうことですか？」

僕が便箋をマイクに渡すと、それを読んだマイクとローラが少し興奮気味に言った。

「やったじゃないか。これは要するに、君の実力を認めたから、この夏のテストに合格したら大学に行く奨学金をあげるよってことだよ。まずは第一関門突破だね」

「おめでとう、ダン」

「え？ でも、『実力を認めた』って…。どうやって？」

困惑する僕に、ジェニーが微笑んだ。

「この間のあの、大きな門の一件じゃない？ あれ、大人の番人が数人掛かりでも閉められなかったでしょ？」

「ああ…。でも、あれって、たったの数日前…」

「あれだけ大きな門だったんだもの。協会の上の人なら、きっと遠くにいても感知してるわよ」

「へー。そういうもの、なんだ…」

「まあ、レポートもちゃんと書いたしね。あの大人たちに手柄を持つていかれないように、『私とダンの二人で閉めました』って、しっかり書いたよ」

そう言っただ得意顔で微笑むジェニーの手にも、同じ封筒が握られていた。

「って、ジェニーも…？」

僕が尋ねると、ジェニーは「ああ」と言いながら手に持っている封筒を僕の目の前でヒラヒラと振った。

「当然でしょ？ 私が選ばれなくて、どうするのよ」

「まあ、そうだろうけど……」

「フフ。でも、私はテストをパスしてるも同然なんだけどね。ま、一応、それじゃ形にならないから夏の試験には出て来いって」

「『形にならない』って……？」

「形式上、選抜試験は一応受けに来なさいって。ほら」

そう言っただけで出されたジェニー宛の協会からの手紙には、確かに「ジェニー・オルセンを本協会の大学奨学生と認める。但し、本年度夏に実施される選抜試験には形式上、出席されたい」と書かれていた。

「フフフ。ほーらね？」

得意気に笑うジェニーの頭を、マイクがペシッと軽く叩いた。

「いったー！」

「ジェニー。前にも言ったが、奨学生に選ばれても学力が伴わなければ、資格が撤回される可能性もあるからね？　しっかり勉強しなさい」

ジェニーは頭を押さえながら、軽く舌を出した。

「はあーい」

マイクは僕らを交互に見ながら微笑んだ。

「よろしい。ダンと二人で頑張りなさい。とりあえず、ダンは五月に行なわれる番人の検定試験に受からなければ、選抜試験を受けられないからね？」

「あ、はい！　これから宜しくお願いします！」

僕が頭を下げると、マイクとローラは嬉しそうに微笑んだ。

「よーし。じゃ、瞑想の訓練するぞ！　ほら、ジェニーも一緒に！」張り切って僕らを鍛えようとするマイクに、ジェニーが抗議した。

「ええー。今からあ？」

「文句言わない！」

「はあーい……」

どんな訓練だって、あの家での時間よりも数倍楽だ。あの家の呪

縛から解き放たれるのなら、僕はどんな訓練だって耐えられる。

僕は僕の歩く先に、明るい光が見えてきたような気がした。

- - - - -

その日のディナーは、ローラが僕の好きなローストビーフを作ってくれた。

はつきり言つて、僕はローラが作るものなら何でも好きなんだ。こういう言い方をすると、何か語弊があるかもしれないけど、実際にローラが作るものは何でも美味しいし、普段家庭料理と縁の無い生活をしている僕には、ここでの食事は天国のようだ。

今、中央に可愛らしい花のアレンジメントが飾られたダイニング・テーブルを、ジェニーの両親と祖母のジョアン、ジェニーと僕の五人が囲んでいる。その傍らではインキーとスモーキーの2匹が彼らの夕食を採っている。

(いいな、家族の食卓って…)

ここで食事をする度に、いつもそう思う。

僕の家では、義母が家を出てから家族が揃って食事をする事が無くなってしまったから、食事は一人で黙々と食べるものになっていた。

「そうだ。ダンに訊きたいことがあるんだ」

食事の途中で、おもむろにマイクが僕に尋ねた。

「何ですか？」

「さっき、ローラと母の三人で話し合ってたんだが…」

マイクはそう言うと、軽く咳払いをしながら居住まいを正した。僕もつられて背筋を伸ばす。

「ダン。良かったら、私達と一緒に、この家に住まないか？」

「…は？」

思いがけないマイクの台詞に、僕は困惑した。

（住む…？ この家に…、一緒に？ え？ ここに、住む…？）
「えっ？！」

何故か、僕と同時にジェニーも声を上げた。それに驚いて、僕らはお互いの顔を見合わせた。その様子を見ながら、ローラとマイクが声を上げて笑い始めた。

「何を二人とも驚いているんだか、ねえ…」

ジョアンおばあちゃんがそう言いながらやんわりと笑った。

「え、だ、だつて…。ダンが、ここに、住むの…？」

何故か僕以上に困惑しているジェニーが尋ねると、マイクとローラが頷いた。

「ローラが、その方がダンも修練や仕事をしやすいんじゃないかって言っただ。確かに、ダンがここにいてくれたら、我々は動きやすい」

（確かに、その通りではあるけれど…）

幸い、僕の家には僕が新月の夜、明け方まで帰ってこないことがあることを咎める人は誰一人としていないけれど、未だに携帯電話を持たない僕は、彼らと近い場所にいた方が色々と便利なのはわかってる。それに―。

（あの家から、離れられる）

隣とは言え、家自体は離れているし、何よりもあの薄暗い、ジメジメとした家から離れられるのはありがたい。

「僕は―」

そう言い掛けて、僕はジェニーを見た。ジェニーは真つ赤な顔をしながら俯いていた。それを見て、僕は焦った。

（え？ ジェニーは、イヤなのかな…？）

僕は恐る恐るジェニーに尋ねた。

「ジェニーは、僕がここに住んでも、大丈夫…？」

僕の言葉に弾かれたようにジェニーが顔を上げて僕を見た。青い瞳が不安気に揺れている。

「ジェニーがイヤなら、別にいいんだ、今のままで」

僕がそう言うのと、ジェニーは勢いよくブンブンと首を横に振った。
「ち、違うの。そうじゃなくて…。私は、ダンがここに住むのは、
いいことだと思う」

そう言っただけ、ジェニーはまた俯いた。その横顔は、耳まで真っ赤だ。

（ジェニー、体調が悪いのかな…？）

僕はそんなことを思いながらも、マイクとローラに向かって背筋を伸ばした。

「本当に、いいんですか…？　僕が、ここにお世話になっても」
「もちろんよ」

微笑みながらそう言うローラに、マイクが頷いた。

「やっぱり、男の子のいる食卓は賑やかでいいしねえ」

ジョアンおばあちゃんがそう言いながら笑った。

この、暖かな場所にいられるなんて、本当に夢みたいだ。

番人になると決めてから、少しずつ、僕の欲しかったものが手に入っているような気がして、僕は嬉しかった。ただ、横で真っ赤になりながら俯いているジェニーが気になるけれど…。

- - - - -

どうしよう…。

私は自分の部屋に戻ってから、かなり悶々としている。時折隣の部屋から聞こえる物音に、ビクッと身体が反応する。今までダグがいた時はそんなことは一度もなかったのに、あそこにダンがいると思うと、変に意識してしまう自分が情けない…。

私はベットの上に座りながら、枕をギュッと抱き締めて、その上に顔を埋めた。

―ダンが、うちに住む。

それは、今までに何度か私も思ったことよ。

ダンの家が複雑なのは、昔から知ってる。ダンの家に起こった話を聞く度に、ダンがこの家の子になっちゃえばいいのって思った。でも、それは叶わないことだと思っていた。だって、私は門の番人の一族で、ダンは違うから。

幼い頃から、自分達は町に住む他の人たちとは違うのだと教えられてきた。私達には私達の使命があつて、それは他の人たちには知られてはならないこと。

昔はもっと、大っぴらに番人として一族の者たちは生きていたって習った。ただ、それがいつの日からか出来なくなった。夜に街中を徘徊しては怪しげな術を使う番人や、魔物と平気な顔して戦うハンターを、昔の人達は「魔女」って呼んで、そのせいで魔女裁判にかけられた一族の人たちが、大勢処刑されたのだという。

それ以来、番人の一族は世間から隠れ住んだり、自分の正体を一族以外の者から隠しながら生きてきた。だから、私達は一族以外の人たちとの間には壁を作つて、距離を置いて生きている。それが、私には時折、辛かったわけなんだけど。ちっちゃい頃は、どうして他の子達と遊んじゃいけないのか、わからなかったし。

ダグや私には、友達と呼べる人がいなかった。ダンは小さい頃に出会つてから、いつも私の事を気遣つてくれたけど、私には、それにどこまで応えていいのか、わからなかった。

だから、ダンに番人としての姿を見られた時はどうしようかと思つて、めちゃくちゃ焦った。けれど、その後にダンに門が見えていたのが判つた時は、すごく嬉しかったし、ダンが番人になると決心してくれた時は、これでダンとの間に壁を作らなくてもいいんだつて、内心ほつとした。

「でも、まさかうちに住むだなんて……」

正直な話、エマにダンとの関係を訊かれた時から、自分とダンの関係が余計にわからなくなっている。それに加えて、最近の学校での女の子達のダンに対する騒ぎ方といったら……！ ちよつと私がダンの側にいないだけで、チャンスとばかりにダンを取り囲むのは、

一体全体、どういうわけなのよ？ つい最近まで、ダンのことなんて空気扱いしてたくせに！

はぁ。落ち着け、ジェニー。

最近、ダンのことを考えると、私の思考回路がおかしな方向に行ってしまう。

この間も、そう。

庭先でストレッチしているダンが綺麗だったから、思わず見とれてしまった。

ちよっと待って？ 「ダンが綺麗」って、それってどうなの？

相手はダン（男）よ？

でも、本当に綺麗だなんて、思ってしまった。あのダンに…。あああ！ 一生の不覚！

水道で顔を洗ってるときも、肩とか、背中とか。あれ？ ダンってこんな風だったっけ？ って…。

極めつけはその後。何で脱ぐのよ…。しかも、この私の目の前で！ 綺麗だなんて思ってた肩や背中が、Ｔシャツ越しじゃなくて、生よ、生！ しかも、意外と筋肉があるからビックリした…。

あ、待って？ 筋肉が出来たのって、私と一緒に筋トレに行ったりしてるからじゃないの？ そう言えば、最初の頃はヒーヒー言いながらベンチプレスとかやってたのに、最近は「ヒー」とも「グエ」とも言わずに、黙々とこなしてるのよね。

ランニングだって、最初の頃は最後の１マイルくらいの間、死にそうな青白い顔して「ジェ、ジェニー、もうちよつと、スピード落として、は、走って…」とかゼエゼエ言いながら言ってた様な記憶があるのよ。元々がヒョロヒョロした子だったしね。それが今じゃ、こつちが時々「ペースもうちよつと下げてよ」って思うくらいなのに…。悔しいから絶対に言わないけどっ。

ああ、何だか腹が立ってきた。何か、ずるい！

そうよ。ダンばかり、カッコよくなっちゃって…。それで女の子達が周りでキヤーキヤー言ってるわけでしょ？ 何よ。全部、元

はと言えば、ダンの番人の素質を見抜いたこの私のお陰じゃないの！
そう思いながら顔を枕に沈没させていると、以前エマが私に言った台詞を思い出した。

『だからさー。手を繋いだり、ハグしたり、キスしたり、抱き合ったりしたいってことじゃない』

ダンと。他の女の子達が…。

私、ダンと手を繋いだり、ハグしたりしたことあるわ（子供の時だけ）。

キスも、さよならのキスとか、沢山したし（おでこやほっぺにね）。

抱き合う…は、さすがに無いけど。

ダン、と…？ えーっと…。それは…。きやあああああ！

その時、私の部屋のドアを誰かがノックした。心臓が一気に飛び上がる。

「だ、だ、誰？」

「ジェニー。僕。ダン」

ダンの声を聴いた瞬間、息が詰まった。

「ジェニー？」

返事をしない私に、ドアの向こうのダンが心配そうな声を掛ける。
返事をしないと！

「あ、あ、開いてるよ…？」

声が変に上ずってしまった。

一呼吸置いてから、ドアの向こうからダンの声が聞こえた。

「開けるよ？」

「うん」

遠慮がちにドアが開いて、ダンがドアと壁の隙間から顔を覗かせた。ベットの上で頭と枕を一つにしようとしている私の姿を見て、ダンが一瞬、両目を見開いた。

「…何やってんの？ ジェニー」

「あ、う…。か、考え事…？」

何で疑問形になっちゃったのかわからない。私の返事を聞いたダンも首を傾げている。ダンは、困った時にいつもするように、鼻を人差し指で少し掻いた。

「えっと、話が、あるんだけど。今、大丈夫？」

「う、うん。入ってきなよ」

「うん…」

ダンは部屋に入ると、ドアを少し開けたままの状態にして、私のベットの側の床に座った。ダンがこの部屋に入るのは初めてじゃないけど、何だかドキドキする。

ダンは少し俯きながら言った。

「その、今日の話なんだけど」

「うちに住むって…話？」

「うん」

ダンはそう言うのと、そのまま黙ってしまった。少し伏せた目は、一体何を見ているんだろう…。

静かに流れる沈黙が、私を一気に不安にさせた。

「あ、あのさ。私は、あの、ディナーの時に、い、言った通りだから」

慌てながら噛み噛みな状態でそう言って、ダンの言葉を待った。

「…本当に？」

そう言いながら顔を上げたダンの瞳と目が合う。小さい頃から変わらない、綺麗な緑色の瞳。その中に、何だか情けない顔をした私が映ってる。

「うん。本当」

私はダンの瞳の中の自分を見つめながら答えた。

「本当に、そう？」

ダンの穏やかな声が、私を心配するように問い掛けた。

「どうして、訊くの…？」

「だってあの時、ジェニーが少し変だったから」

「変って？」

「何か、真っ赤な顔して、下向いてたから。だから、僕はジェニーが本当は僕にここに住んで欲しくないんじゃないかって、そう思った」

「あ、あれは…！」

一緒に住むって言うシチュエーションを想像したら、メチャクチャ恥ずかしくなって、それで―とはさすがに言えなくて、慌てて言葉を引つ込めた。でも、残念ながら、ダンはそれに気付かないような人じゃない。

「『あれは』、何？」

「言わない」

プイ、と顔を横に背けると、ダンがクスツと笑うのが聴こえた。

「ふーん」

「絶対に、言わないからっ」

「そう？　じゃ、わかった」

ダンはそう言うといよいよと立ち上がった。

「へ？」

拍子抜けした私がダンを見上げると、ダンいつもの優しい笑顔で微笑みながら私を見下ろしていた。

「イヤじゃないなら、いいんだ。僕、ジェニーが本当はイヤだと思ってるのに、それを押してまで無理にここに住みたいとは思わなかったから。ジェニーが賛成なら、僕も安心だし。じゃ、僕もう寝るね。おやすみ」

「あ。う、うん。おやすみ」

ダンはそのまま部屋を出て行って、閉じられたドアの向こうから、ダンが隣の部屋に入る気配が聴こえた。

ダンがこの家に泊まるのは、これが初めてじゃない。昔にも、何度かこういうことがあった。けど…。

隣がこんなに気になるなんて、今までに一度も無かった…。

っていうか、何なのよ、これ！

私は悶々としたまま、しばらくの間、ベッドの上でイモムシのよ

うにコロコロと転がっていた。

Chapter 4

僕の家族は、僕が四歳の初夏にこの町に引越してきた。その前に住んでいた町の記憶は、僕には無い。その頃の僕の家族は四人家族。父、母、姉、そして僕。

始めの頃は幸せだったと思う。家は古かったけど小綺麗で住みやすかったし、庭でバーベキューやったり、水遊びしたりして、楽しかった記憶がある。

そのうち、父が忙しくなったのか、家の中で滅多に顔を合わせなくなつた。夏が過ぎ、秋が来て、姉が小学校に通う間、僕は母に外で遊んでいると言われることが多くなつた。母がそう言う時は、大抵見知らぬ車がうちの前にやって来た。

やがて冬になって、外で遊ぶのも大分辛くなってきた。僕は動いている方がマシだと思って、当ても無く歩き始め、知らないうちに森の中に入っていた。あれほど怖いと思っていたのに、入ってみると、意外と森の中は色んな物が転がっていて楽しかった。

僕は木の枝や枯葉や木の実を必死になって集めていた。何のために集めていたのかは、全く覚えてない。そこに転がる全てのものを自分のものにしたらよかったのかもしれない。

「ねえ、あなた、どこの子？」

突然声を掛けられて、僕はビククリして顔を上げた。そこには、ビククリした僕にビククリした女の子が両目を見開いて立っていた。「ジェニー？ どうしたの？」

遠くから、優しそうな女の人の声がした。ジェニーはハツとして後ろを振り向くと、その声に向かって大きな声で答えた。

「マミー。ここに、男の子がいるの」

「え？」

ジェニーの言葉に驚きながらやって来たローラは、僕を見るとさらに驚いた。

「あら。あなた…。確か、ウィーザーさんのところの男の子ね？
えっと、ダニー君、だったかしら？」

僕は当時、母にダニーと呼ばれていた。僕は全く知らなかったのだが、ジェニーの家族が一度うちに挨拶に来たことがあって、僕はその時、庭で穴を掘って遊んでいたらしい。

「まあ、そんな格好で、寒いでしょう？　こんなところで何をしているの？」

ローラは彼女が着けていたマフラーを取ると、ローラの問に何て答えたらいいのか分からずにモジモジしていた僕の首に巻いてくれた。吐く息が少し白くなるほどの気温だったのに、僕はジャケットも着ずに外にいた。マフラーは柔らかくて、何だかいい匂いがした。
「あ、ありがとうございます…」

お礼を言った僕に、ローラはニツコリと微笑んだ。

「まあ、礼儀正しいのね。ジェニーもダニーみたいに素直にお礼が言えるようになるといいのね」

ローラの言葉に、ジェニーが少し赤くなりながら両頬をぷーっと膨らませた。

「い、いいじゃない！」

「はいはい。ダニーは一人でここまで来たの？」

ローラの問に、僕はこっくりと頷いた。

「あら、そうなの。じゃ、うちに寄って行きなさい。一緒におやつ
の時間にしましょ？　その後で私がお宅に送り届けてあげるから。
ね、そうしましょ？」

「え、でも…」

僕がまごまごしていると、ローラが僕の右手を取った。

「ほら、手もこんなに冷たいし。お腹、空いてない？　今日は少し
冷えるから、あなたを一人でここに置いて行くわけにはいかないわ
さ、いらつしゃい？」

「う、うん…」

僕が頷くと、ジェニーが嬉しそうに僕の左手を取った。フワリと

何か甘い臭いがした。

「じゃ、行こ！ ジェニーね、今日、マミーと一緒にクッキー焼いたんだ！」

ああ、クッキーの匂いか。でも、クッキーの匂いって、こんなに美味しそうな匂いだったっけ…？ それに、クッキーって、家で焼けるんだ…？

「すごいね、ジェニーはケーキ屋さんになれるね」

僕がそう言っていると、ジェニーがはにかんだように笑った。

「なれないよ。だってジェニー、クッキーに飾り付けたただけなもの飾り？」

クッキーに飾りなんてあつたっけ？ そう思いながら首を傾げている僕を見て、ローラが笑いながら言った。

「あら、ダニー、よかつたらやつてみる？ 飾りつけの済んでないクッキーがまだ沢山残っているし」

「いいの？」

「もちろん。いいわよね、ジェニー？」

「うん。じゃ、ジェニーもやる！」

「あらあら。さっきは飽きたから外に行こうって言い出したのにね」僕は笑いながらジェニーの家に到着した。

ジェニーの家は僕らの家と同じように古い家だったけれど、二回くらい大きな家で、自然光が差し込むリビングがとても暖かい場所に感じられた。

暖炉の上には家族の写真が沢山飾られ、沢山の笑顔に包まれて、そこには確かに「幸せ」があつた。

僕はジェニーと一緒にクッキーにピンクや黄色のアイシングを塗り、チョコレートやカラフルな色のデコレーションを振りかけた。

出来上がったクッキーをジェニーと一緒に食べていると、キッチンからローラが首を傾げながら出てきた。

「おかしいわねえ。ねえ、ダニー。あなたのお母さん、おうちにいらつしやるのよね？」

「うん。僕に、お客様が来るから外にいなさいって。僕が外で遊んでたら、お客さん、来たよ？」

「その方と一緒に、外に出掛けてしまったのかしら…？」

「…知らない」

僕がそう言うと、ローラが困ったような顔をして微笑んだ。

「そう。じゃ、もう少しうちでジェニーと遊んでいなさいね？」

「いいの？」

「ええ」

それからしばらくして、やっと僕の母親と連絡が取れたローラは、僕を車に乗せて送ってくれることになり、ジェニーが余ったクッキーを綺麗な色の花のプリントが入った紙に包んで「お土産ね？」と言って僕にくれた。

日も沈んだのに、僕の家は電気もほとんど付いていない状態で、何だか薄暗かった。

ローラが玄関のベルを押すと、しばらくしてから僕の母がドアを開けた。

「こんばんは。お電話させていただいたオルセンです。ダニー君を送ってきました」

ローラがニツコリと微笑みながらそう言うと、僕の母は無表情のまま「そりゃどうも」と言っ僕僕の腕を掴んで家の中に入れた。

「え…？」

あまりの勢いに、僕は何が起こっているのかさっぱりわからなかった。

「あ…」

何とか振り向くと、ローラが何かを言いかけたまま、玄関のドアが乱暴に閉められた。

母は僕の腕を掴んだまま薄暗いリビングまで僕を連れて行くと、パツと手を放した。その反動で僕はよろけて、手に持っていたジェニーから貰ったクッキーの包みが僕の手を離れて床に転がり落ちた。

「あ！」

それはリビングでテレビを観ていた姉の足元まで転がり、姉が包みを拾った。

「何これ？」

「…クッキー。ジェニーにもらったんだ」

「ふーん」

姉はそう言いながら、僕に取られないように包みを高く持ち上げた。僕は一生懸命にジャンプをしたけれど、どうしても手が届かなかった。

「返してよ。それ、僕のだよ？」

「へえー」

姉は包みをしばらく眺めていた後、おもむろにそれを床に落とした。僕がそれを拾う前に、姉は包みを思いっきり踵で踏みつけた。バリバリとクッキーが砕ける音がリビングに鈍く響いた。紙の包みが破け、クッキーの欠片が床に散らばった。

「な、何するんだよ！」

「あら。クッキーなんて虫歯になったり、太ったりするだけよ？」

そんなもの、いらないじゃない」

「僕のだぞ！」

「へえ？」

「返せ！」

「じゃあ、持つてけば？ そこにあるじゃない」

姉は床の上にグチャグチャになった包みを見下ろしながらクスリと笑うとソファに座り直し、またテレビを観始めた。

僕は涙目になりながら包みを床から拾い上げた。中のクッキーは粉々になっていて、包みの裂け目からパラパラと欠片が零れ落ちていく。

「せっかく、僕に、くれたのに…」

クッキーの包みを持ったまま立ち尽くしていると、キッチンから出てきた母が忌々しげに「あーあー。こんなに散らかしてくれて。」

後で自分で掃除しといておくれよ？」と溜息を吐きながら言つと、そのまま二階へ上がっていった。

僕は言われた通りに床を片付けると、キッチンで包みにかろうじて残っていたクッキーを食べた。クッキーは甘くて美味しかったけど、僕の気持ちは沈んだままだった。

それから四年後、母が突然姿を消した。男と逃げたらしい。それから二年後、父が再婚して義母と義妹がやって来た。

それから五年後、義母は義妹を連れて出て行った。年を重ねる毎に、この家からは幸せが零れ落ちていく。あの日、僕の手の中から零れ落ちていったクッキーの欠片のように――。

――

――

ジェニーの父、マイクから同居の申し出を受けてから、十日が過ぎた。

それまで家やオフィスに何度も電話しても全く捕まらなかった僕の父が、その日は勤務先に電話を掛けたらやっと捕まった。僕の家族は誰も携帯を持っていないから、こういう時に本当に不便だ。

「何か用か？ 金なら、今無いぞ？」

電話口で開口一番に不機嫌そうに吐き捨てられた。これが久しぶりに会話する父からの第一声とは、本当に情けない。

「お金のことじゃないんだ。僕、オルセンさんから彼らの家に一緒に住まないかって誘われてるから、行くね」

「は？ オルセン？ うちの近所の？」

「そう」

少しの沈黙の後、父がブツブツと言いだした。

「――で、俺はいくらオルセンに払わなくちゃいけねーんだ？」

「は？」

僕は父の言っている言葉の意味がよくわからなかった。僕が困惑したまま沈黙していると、父が溜息を吐きながら言った。

「だーから。オルセンは、お前をヤツラの家に住まわすのに、一体いくら金を要求してんだよ」

（ああ、そういう意味か）

理解できたのは嬉しいけれど、その内容は全く嬉しくなかった。

僕は父に聞こえない様に溜息を一つ吐くと、「タダだよ」と答えた。

「はあ？ 『タダ』って言ったか？ お前」

「うん。気にするな、遠慮するなって言ってくれてる」

僕がそう言っていると、途端に父の声色が明るくなった。

「なあんだ。そうか。なら、とっとと行け。じゃあな」

「あ、ちよつと待って。一筆サインして欲しい紙があるんだけど」

「…何だよ」

父の声がまた不機嫌に戻った。

「僕がオルセン家に同居することを、父さんが許可したっていう覚書だよ。ほら、僕、一応まだ未成年だから。ちゃんと、オルセン家での生活には父さんは一切関与しないって書いてあるから、安心してよ。お互いを守るためにも、サインして欲しいんだけど？ 忙しいなら、オフィスに今から持って行くけど？」

「はあ。あー、まあ、わかった。なら、オフィスにとっとと持ってきて。その場でサインしてやる」

「オーライ。じゃ、今から寄るね」

電話を切ると、横で会話を聞いていたジェニーが小さな溜息を吐いた。

「相変わらずねえ」。じゃ、今すぐ、おじさんのオフィスに行くのね？」

そう言いながら車のエンジンを掛け始めたジェニーに頷きながら、僕はジェニーに借りていた携帯でマイクに電話を掛けた。すぐに電話に出たマイクに、これから父のオフィスに向かうことを告げると、

マイクと向こうで落ち合う段取りを整えた。

電話を切ると、僕はジェニーに携帯を返しながら言った。

「さて。これで準備はOK。僕としては、今日中にサインしてもらいたい気分だよ」

「そうね。じゃ、行きますか〜！」

ジェニーは笑顔で車を走らせ始めた。

僕の父が勤める会社のオフィスは、町のダウンタウンのオフィス街から少し外れた場所にある。色んな家電製品を修理する仕事をしている会社だ。父は昔はコピー機などのオフィス機器を扱う仕事をしていたらしいけれど、酒癖と女癖の悪さが原因でクビになったそう。その後も色んな会社に勤めては、同じような理由でクビになった。母や義母も逃げるわけだ。

オフィスの駐車場に車を停めて待っていると、マイクの手が現れた。マイクの手には、マイクともう一人スーツ姿の男性が乗っている。今回の書類を作ってくれた弁護士さんで、実は門の番人の一族の人間だそう。

僕はジェニーを車に残してオフィスに入った。小さなオフィスだけれど、ちゃんと入口に電話番兼受付のオバサンが座っている。父の名を告げると、彼女は面倒臭そうに電話を取って内線を掛けた。しばらく待たされた後に、父がようやく姿を現した。昔は僕みたいに背ばかり高かったらしい父も、今ではすっかり腹も出て、作業着のボタンがかるうじて留まっているような状況だ。

「よお」

「久しぶり、父さん」

父は僕の後ろに立つオルセンさんと弁護士を見ると、少し眉間に皺を寄せた。

「ああ、ウィーザーさん。お久しぶりです。マイク・オルセンです。この度は、こちらの無理を聞いてくださって、ありがとうございます。あ、こちらは今回の書類を作ってくださいました弁護士さんです」

僕の父の警戒心を見越したマイクが朗らかに挨拶をした。父は「あ、どうも」とかモゴモゴと歯切れの悪い挨拶を交わし、弁護士が差し出した名刺を片手で受け取ると、それを見もしないでさっさと胸ポケットに突っ込んだ。弁護士はそんな父の横柄な態度にも顔色を変えず、手際良く書類を受付カウンターの上に広げた。受付係のオバサンが不快そうに片眉を上げたけれど、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

弁護士が、落ち着いた穏やかな声で説明を始めた。

「では、今回、ダン君がオルセン家に同居するに当たりまして、彼はまだ未成年ということですので、こちらに保護者であるウィーザーさんに同意をしていただきたいと思います。サインの前に、何かご質問はございますか？」

「いや、別に」

父が面倒臭そうに答えると、弁護士は事務的に頷きながら書類のページをめくった。

「では、こちらと、こちらに御署名を」

二組の書類を示された父が、怪訝そうな顔をした。

「あん？ 二つもあるのか？」

「一つは父さんの控え。もう一つはオルセンさんの控えだよ。どっちも中身は同じものだよ」

僕の答えに、父は「はあー」とか言いながら書類に目を通さずにサインを始めた。

「なんだよ。御大層な契約書みてーだな」

（似たようなものだけどね）

そう思っても、口には出さない。この書類は、実は未成年の僕の保護者を代えるためのものだから。父がサインすると同時に、僕の保護者はオルセン夫婦になる。

「では、オルセンさん、あなたも御署名を」

弁護士に促され、父がサインをした書類に今度はマイクがサインを始めた。マイクは既に弁護士とこの書類の内容についての話を終

えているから、彼もあつと言う間にサインを終えた。その後には弁護士が確認し、彼が立会人としてサインをした。これで完了だ。

「では、こちらがウィーザーさんの控えとなります。ダン君が成人するまでの間、大切に保管しておいて下さい」

弁護士が書類を三つ折にして封筒に入れ、父に渡した。父はそれを無造作に作業服の胸ポケットに突っ込んだ。

「じゃ、後はこいつを好きにしてくださいって結構なんで」

父はやつと解放されたと言わんばかりにひらひらと手を振りながらオフィスの奥へと去って行った。

父の姿が見えなくなった後、弁護士はもう一つの書類を封筒に入れ、それを自分の鞆に丁寧に仕舞った。

「ここではなんですから、駐車場に移動しますか？」

「ええ。そうしましょう」

弁護士に促され、僕らはオフィスを後にした。駐車場では、ジェニーが車の側で僕らの帰りを待っていた。

「あ、おかえりー。サインしてもらった？」

「うん」

「よかった！」

喜ぶジェニーに頷くと、ポン、とマイクが僕の肩を叩いた。

「さて、と。じゃ、これでダンはいつからでも、うちに引越せるね？」

「はい。これからジェニーにうちに寄ってもらって、今日中に残りの荷物を運ばせていただきます」

「わかった。ローラに知らせておかなくっちゃな。あいつも喜ぶよ。じゃ、また後で家でね」

「はい。今日はわざわざ、ありがとうございました」

僕がマイクと弁護士の二人に頭を下げると、二人は笑顔で手を振りながらマイクの車に乗り込んだ。

マイクと弁護士を乗せたマイクの車が去ったのを見届けてから、僕はジェニーの車に乗り込んだ。エンジンを掛けながら、ジェニー

が言った。

「結構遅かったから、心配しちゃった」

「父さんが出てくるのが遅かっただけだよ。来た後は、さっとサインしただけだったけどね」

「ってことは、中身を読まなかったの？ おじさん」

「読むわけ無いだろ、あの人が。普段新聞だって読まないのに、法律関連の書類なんて、最初の1行でアウトだよ」

「後で文句とか言ってこなけりゃいいけど」

「『好きにしてくれ』って言ってたから、それは無いよ」

「そうなんだ…」

車が動き出した。もう、全てが走り出しているんだ。

「でも、間に合って良かったよね。検定試験、もうすぐだし」

「うん」

僕らが他愛の無い話をしている間に、車が僕の家に着した。

僕はジェニーにすぐ戻ると言って、一人で家の中に入った。僕の部屋はとくに片付けてあってガランとしている。元々、持ち物がそれ程多くはない僕の荷物のほとんどが本だったけれど、それもほとんどを町の古本屋に持って行った。だから、ジェニーの家に持っていくものは着替えるくらいしかない。それも少し大きめのボストンバックに全部収まってしまふ程度の量しかなかった。

自分の部屋に戻って荷物の入ったボストンバックを担ぐと、僕はほとんど生活感の無くなった僕の部屋を見渡した。十年以上住んだこの部屋にいい思い出はほとんどないけれど、いざ離れるとなると、少し寂しい気もした。でも、これは僕の選んだ道だ。

僕は部屋のドアを閉めると、階段を降り始めた。相変わらず嫌な音を立てて軋むこの階段も、通るのはこれが最後だと思いたい。

酒臭いリビングを抜けて、玄関に辿り着く。ドアをこじ開けて外に出ると、妙に風が心地良かった。

僕は後ろを振り向かずに、そのままジェニーの車に乗り込んだ。
「行っても、大丈夫？」

ジェニーが心配そうに僕を見た。そんなに心配しなくても、僕は
この家に何の未練も無い。

「うん」

僕が微笑みながら頷くと、ジェニーが安心したように微笑んだ。

「それじゃ、出発！」

車が動き出した。

開けた窓から流れ込んでくる空気が、僕の心を軽くしてくれた。

――

その次の土曜日。

いつもの修練を済ませると、僕とジェニーはジェニーの両親と一緒に町の小さなモールに買い物に出掛けた。前日に支払いが入り、僕も仕事に応じて支払いを受けたから、前にジェニーとした約束通り、僕の服を買いに行こうかという話をしていたところ、僕の誕生日が近いからということで、マイクとローラが僕に服をプレゼントしてくれると言うことになった。

「でも、悪いですよ、そんな……」

「あら。洋服くらい、大丈夫よ？ だから、今日もらったお金は、何か別に自分のことにお使いなさい？」

「は、はあ……」

そんな会話を交わしながら、僕らはモールに到着した。モールは意外と混んでいた。

「何か混んでるね、今日」

「プロムが近いからじゃない？」

あっさりと答えたジェニーの言葉に、僕は納得する。

「あ、そっか」

「ダンも断らなかつたら、今頃プロムの準備に忙しかったのにねえ

……」

「冗談じゃないよ。断って良かったよ」

「あら、ダン、プロムのお誘いを断っちゃったの？」

僕らの後ろを歩いていたローラは、僕らの会話を聴いていたらしい。

「あ、え、まあ……」

僕が言葉を濁していると、ジェニーが意地悪そうにニヤリと笑って言った。

「母さん、ダンね、ダンを誘った上級生の女の子に『無理！』って言って、一言で断ったのよ？ 酷くな〜い？」

「あらあら」

「い、いいだろ、僕のことはい！」

「はいはい……。あ、あのお店はどう？ ダン、あそこのTシャツ、好きでしょ？」

「あ、うん」

「じゃ、入る！」

僕らは最近流行っている店に入ると、服の掛かったラックの間を歩きながら、あれこれと見て回っていると、誰かが僕に声を掛けた。

「きゃあ！ ダン！ 奇遇〜！ 今日はお買い物？」

最近学校で僕にやたらと付きまとってくるクラスメートの女の子だった。彼女の側には、彼女といつも一緒にいる女の子がいる。

「あ、やあ……」

「もしかして、一人……？ だったら私達と一緒に買い物しない？」

「え、えーっと……」

僕が返事に困っていると、横からよく通る声がした。

「ダン。ジーンズはどっちの色がいい？」

女の子達が一斉に声の方を向く。そこには、全員の予想通り、両手にジーンズを掲げたジェニーが満面の笑顔で立っていた。

「私はこっちの方が似合うと思うんだけど、ダンはどうちがが好き？」

「あ、僕もそっちの方が好きかな」

「じゃ、こつちにしようか。サイズは念のため、2サイズ試した方がいいわよね？」

そう言って微笑むと、ジェニーはさらに僕の後ろにいる女の子達に向かって晴れやかな笑顔を向けた。

（おい。こら、ジェニー。確信犯かよ…）

案の定、女の子達はかなり焦った顔をして、僕に詰め寄ってきた。
「ダン。もしかして、ジェニーとデート中…？ やっぱりあなた達、付き合ってたの…？」

「えっと、デートってわけじゃないんだけど…」

僕がそう言っていると、後ろから声がした。

「ダン。ジェニーが試着室の前で待ってるけれど…。あら、お友達？」

「あ、ローラ。えっと、彼女達は学校のクラスメートです」

ローラは「そう」と言うと、ニツコリと微笑んで「初めまして。

ジェニーの母です」と挨拶をした。それがさらに女の子達を圧倒する。ジェニーのお母さんだけあって、ローラもかなりの美人だ。

「ダン。私とマイクはその辺りのお店を覗いているから、決まったら携帯に連絡してね？」

「あ、はい。わかりました」

ローラが満面の笑顔で「じゃあ」と言って立ち去ると、女の子達はローラに引き攣った笑顔で手を振り、ローラが見えなくなると僕に「またね」と言ってそそくさと去って行った。

「何だ、ありゃ？」

女の子達の不可解な行動に首を傾げながら試着室に向かうと、ジェニーがその手前で両手に山のように服を抱えて待っていた。

「もう。遅いよ、ダン。あの子達と何話してたの？」

「何も？ ジェニーと付き合ってるのかって訊かれて、すぐその後ローラが僕に声を掛けたら、何か、さーっといなくなった」

僕の答えに、ジェニーはニヤリと笑った。

「ふーん。で、何て答えたの？」

「へ？」

「だから。私と付き合ってるのかって訊かれて、ダンは何て答えたの？」

「別に……？」

途端に、ジェニーがムツとした顔になった。ジェニーは僕に服の山を押し付けると、「とつとと試着してきなさいよ！」と言って僕の背中を乱暴に押した。

……わけがわからない。

何だかんだでジェニーに押し切られた形で、僕は大きな紙袋2つ分も服を買ってもらってしまった。恐縮しまくりな僕とは対照的に、ジェニーとローラは満足気だ。他人の物でも、買物物は女性にパワーをくれるものなんだろうか。

四人でそのままモールの中を歩いていると、遠くに思いがけない人を見かけた。

（あれは……？）

僕が見ていると向こうも気付いたようで、彼女は驚いたような顔をしたまま僕を見つめていた。小柄なその中年の女性は最後に会った時よりも元気そうで、僕は声を掛けるかどうか、躊躇った。

「マミー、お待たせ！」

元気な明るい声がして、女の子がその人に駆け寄った。その子はすぐに彼女の母親の様子がおかしい事に気が付いて、その視線の先を見つめた。そして、僕と目が合った。

「ダンお兄ちゃん……？」

女の子が僕の名を呼んだ。

僕らの様子に気付いて少し心配そうな顔をしていたジェニー達に断りを入れて、僕は彼女達に近付いて声を掛けた。

「ハイ、ダナ。久しぶり。キャリーは、随分背が伸びたね？」

笑顔でそう言うと、ダナは少し安堵したように微笑んで僕をそつと抱き締めた。ダナは僕の義母だった人で、キャリーは彼女の連れ

子だ。僕らは2年前まで「家族」だった。あれ以来、会つのは今日が初めてだ。

「元気そうね、ダン。今日は、お買い物？」

ダナが僕と僕が持つている買い物袋を交互に見ながら尋ねた。

「うん。オルセンさん達、覚えてるでしょ？ 僕、今、彼らの家でお世話になってるんだ」

「え……？」

ダナは驚いて僕を見つめた。僕は笑顔で頷いた。

「うん。家を出たんだ。とは言っても、つい最近のことだけど。そっちはどう？ 二人とも、元気そうだね」

ダナはフツと微笑むと、ゆったりと頷いた。

「ええ。私達は元気でやっているわ。最近、何とか生活にも余裕が出てきたの。キャリアも色々手伝ってくれてるし。助かってるわ」

ダナの言葉に、キャリアが照れくさそうに俯いた。十歳になっても、少し照れ屋なのは相変わらずらしい。

「それなら良かった。少し心配していたんだ」

「まあ。連絡できなくて、ごめんなさいね」

「うっん……。じゃ、僕、オルセンさん達を待たせてるから」

僕が行こうとすると、ダナが僕を引き止めた。

「あ、ダン、ちょっと待って。これ……」

ダナはバックからカードを出して僕に差し出した。ダナの名刺だ。「私の連絡先。携帯も持つてるから。もし何かあったら、頼ってくれて全然構わないわ」

「……ありがとう、ダナ」

僕はダナの頬にお礼のキスをした。すると、下の方から小さなブーイングが聞こえた。

「キャリアー？」

義妹のキャリアーが膨れっ面をしながら僕を見ていた。

「何？」

「キャリアーも」

「は？」

「キス！」

キャリーはそう言いながら、自分の右頬を指差した。僕は「はい」と言いながら、そこに唇を落とした。

「じゃ、キャリーもお返しね！」

キャリーがお返しに僕の頬にキスをした。屈まなくちゃいけないから、結構辛い。でも、こんなのは久しぶりだから、悪い気はしない。

「キャリーは相変わらず、ダンが好きねえ……」

ダナが笑いながらそう言うと、キャリーが顔を赤くしながら少し俯いて、上目遣いで僕を見ながら言った。

「ダンお兄ちゃん、また会える？」

「うーん。会いたくても、キャリーの家は遠いからなあ……。ま、そのうちね？」

「ええー」

僕の言葉に、キャリーは両頬をぷうと膨らませて口を尖らせた。こついう仕草は、昔から変わらない。

「ほら、キャリー。ワガママ言わないの。ダンも行かないと」

ダナが少し離れた所で僕を待っているジェニー達をちらつと見てから僕を促した。

「うん。じゃ、また」

そう言って歩き出すと、後ろからキャリーの声が聞こえた。

「ダン、またね！」

僕は振り返って、二人に微笑みながら手を振って別れた。

二年前に、まるでフェードアウトしたかのようにあの家から消えた二人と、またこうして再会できるとは思わなかった。しかも、同じ町で……。ずっと会うことも無かったから、二人はどこか遠くへ引っ越してしまったのかと思っていた。

人って、繋がってるようで繋がってなくて、繋がってないようで繋がってる。そんなものなのかもしれない。

帰りの車の中、後部座席でそんなことを考えながら窓の外を眺めていると、隣に座っているジェニーがコツンと自分の頭を僕の肩に乗せた。ジェニーがこうする時は大抵、僕のことを心配してるけど何も訊けない時だ。だから、僕は自分から口を開いた。

「僕なら、大丈夫だよ？」

「そう？」

「うん」

「なら、良かった」

無言になった僕は、そのまま寄り添いながら少しの間眠った。車は静かに、僕らの家へと帰って行った。

その二日後、ローラの手作りケーキと共に、僕は17歳の誕生日をオルセン家で迎えた。

ケーキの上のキャンドルを吹き消すなんて、何年振りだったのだろう…。

- - - - -

門の番人になるための検定試験は、協会から派遣された試験官二人の立会いの下で行なわれる。僕の試験日の二日前に、彼らはオルセン家にやって来た。

一人はカリフォルニア州、サンディエゴからやって来たというメキシカン系のアンガス・ロペス。三十代半ばくらいの彼は少し小柄だけど骨太な体格で、カウボーイスタイルの服を着ているのがジェニーの叔父であるハンターのアルを彷彿とさせた。人懐っこい笑顔が温かい人だ。

もう一人はニューヨーク市からやって来たという黒人女性、ティアナ・ジョンソン。年齢はよくわからないけど、スラリとした長身に長いドレッド・ヘアがよく似合うカッコいいタイプの人で、大き

な瞳が印象的だ。

僕らが学校から戻ると、彼らはリビングでジェニーの両親たちと何やら話し合っていた。

「あら、おかえりなさい。今日は遅かったのね」

僕らに気付いたローラが立ち上がりながらそう言っていると、見知らぬ二人も立ち上がった。

「えーっと。あ、もしかして？」

「初めまして。あなたがダンね？ 私は協会から派遣されてきたティアナ・ジョンソン。こちらは同じくアングス・ロペス。私達があなたの試験官として、あなたの番人としての能力と適正を確かめます。よろしくね？」

ティアナはそう言いながら僕に右手を差し出した。挨拶をしながら二人と握手を交わすと、二人は同じようにジェニーとも握手を交わした。僕は他の門の番人と沢山会ったわけじゃないけれど、この二人からはとても強い覇気を感じた。

「二人とも、とりあえずは座りなさい」

マイクに促され、僕は空いている席に座った。

「で、何が起きているの？」

席に付いた途端、ジェニーが何かを探る様にそう言った。僕にはわけがわからない。

「ジェニー？」

何のことだかさっぱりわからない僕をよそに、ジェニーが試験官達に向かって言った。

「たかが見習い番人の検定試験に、どうして上の人わざわざ遠くから来るわけ？ おかしいじゃない」

ジェニーの言葉に、僕はキョトンとしながら試験官の二人を見比べた。「上の人」？

だが、二人は動ずることもなく、ただニツコリと微笑んでジェニーに言った。

「それは、長老からの命だからです」

ますますわけがわからない。「長老」…？

だが、ジェニーは不機嫌そうに胸の前で腕を組みながら尋ねた。

「私の様子も見て来いってこと？」

「ええ。その通りです」

二人がそう言っただけで、ジェニーが大きく溜息を吐きながら言った。

「ご苦労様」

それを見ながらローラとマイクは困ったような顔をしているが、ジェニーは一向にお構い無しだ。

少しの沈黙の後、ティアナが言った。

「まあ、貴女がお気づきの通り、それだけではありませんが」

「…そう」

ジェニーはそれだけ言うと立ち上がり、脇に置いていた荷物を担ぐと自分の部屋へと行ってしまった。僕は呆気に囚われながら、ジェニーの後姿を見ていた。

（何なんだ…？）

僕が困惑していると、いつの間にか僕の隣に来ていたマイクが僕の肩をポンと叩いた。

「あれのことは、今は気にしないでいい。それよりも、君の試験について、説明をしようか」

「あ、はい…」

こうして一抹の不安を残しながら、僕の検定試験は始まった。

Chapter 5

「検定試験」なんていうから、何か決められた筆記試験だの実技試験だのをやるものかと思っていたら、門の番人となるためのそれは、どうやらそうではないらしい。

試験当日。その日、僕は学校を一日休まされ、試験官の二人と行動を共にした。

やることは「普段週末に行なっている一連の修練を行なう」というものだった。それを聞いた時は、はつきり言って拍子抜けした。でもまあ、「本番」は夜なんだろう、きっと。

僕は普段行なっているランニングから始め、柔軟体操、筋トレなどの基礎訓練から瞑想などの基礎修練を黙々とこなした。朝食や昼食まで、試験官であるティアナとアンガスは僕に引ッ付いて回った。僕が一人になれるのはトイレの中だけという、何とも異様な事態だ。マイクとローラからは事前に、彼らは「普段の僕」を見ているのだと聞いていた。それを聞いてはいたけれど、何だか変な感じた。

二人は僕と一緒にいる間、一言も話さない。まるで自分達は最初からそこにいないかのように振舞っている。不思議なことに、あれほど強く感じていた二人の覇気は、今日は全く感じない。意識しなければ、二人はまるで空気のようだ。気の強弱をこれほどに意図的にコントロール出来るなんて、余程のスキルがないと出来ることではない。どうやら彼らが協会の「上の人」であると言うのは、本当らしい。

（僕にも、出来るのかな…？）

今日の修練の間、僕は自分の気をコントロールしようと試みた。だけど、やっぱりこれは、思いつきだけですぐに出来るというものではないらしい。大体、気を高める修練ばかりを積んでいる今の僕に、その高めた気を逆に失くせというのは、かなり力に無理がある。（まずは、気を最大限まで高められるようになって、制御のことを

考えるのはそれからかな)

彼らと一緒に時間を過ごしながら、僕は自分の未熟さを痛感していた。

夕暮れ時になり、オルセン家の居間にいた僕は、遠くに空気の微妙なズレを感じた。今宵は新月。一月で門が最も緩みやすくなる日だ。

「あっちの方向に門を感じるけど、どう？」

僕は窓枠に座りながら外を凝視していた二匹の門探知猫に問い掛けた。二匹のうち、灰色猫のスモーキーが振り返り、少ししゃがれた男性の声で答えた。

「ああ。北東の方角に二つ、現れかけてるな。手前の方のは結構デカイ。どうする？　マイク」

スモーキーが僕の後ろに立っていたマイクに尋ねると、マイクが頷きながら言った。

「では、大きな方をジェニー。小さな方をダンが閉めるということ、どうだろう」

だが、それまで無言で僕について回っていたティアナが、ここで口を挟んだ。

「マイク。その、大きな方の門を、ダンに閉めさせてみるというのはどうかしら？」

「ええ？」

驚いた僕がティアナを見ると、ティアナは「あら、出来るでしょ？」と、まるでジェニーのような言い方で肩をすくめた。

僕は門のある方向を見つめると、そこに向かって意識を集中させた。今では、ある程度の門ならば、こうして意識を集中させることでその大きさを推し量ることが出来るようになった。

門は僕の身の丈よりも少し高く、横に結構広い。

(僕に、出来るか…?)

僕は目を閉じて、自分の中にそう問い掛けた。すると、いつもの

聴きなれた明るい声が聴こえたような気がして、気分が少し軽くなつた。

僕は目を見開くと、僕の返事を待っているティアナ達をしっかりと見つめて頷いた。

「やります。行かせて下さい」

僕の返事を聞いてティアナとアングスが微笑みながら頷き、マイクが担当の変更を指示すると、僕らは一斉に動き始めた。

僕の目指す門は、オルセン家から車で三十分位車で走った先にある林の中にあつた。少し強めの風が木々の合間を音を立てながら駆け抜けて行く。次第に、その風に別の臭いが混ざり始めた。

僕らが到着した時、目指していた門は既に少し開き始めていた。緩んだ門の隙間から魔界独特の臭いを染み出し、その奥にこちら側を伺う魔物の気配を感じる。

僕は門の前に立ち、門を隅々まで観察した。門の大きさとその形態から「重さ」を計り、どのくらいの力が必要なのかを推し量る。これを間違えると、門を閉め損ねたりするから要注意だ。

（結構「厚い」か…？ とすると、全力で行かないと万が一ってこともあるな）

僕は一度両目を閉じて神経を集中させると、今度は視線を門の中央に集中させた。右手をそこに向かってかざし、自分の意識を掌に注ぎ込む。掌が熱くなつて、そこを中心として、僕の身体はぼんやりとした青白い光に包まれ始めた。自分の手が、まるで水風船に水を注ぎ込んでどんどん膨らませていくような感覚に包まれる。

（よし。気は満ちた！）

僕は門の中央を見つめ直し、一点を定めると、そこに全ての焦点を合わせた。腹に力を込めると、身体の底から詠唱の言葉が立ち昇つて来るようだ。言葉は僕の身体を巡り、そして口から溢れ出す。

「緩みし境界よ、元の姿に戻れ…」

僕の言葉に、門が共鳴を始めた。オオオともウウウとも付かない、

不思議な音が門を震わせた。

「歪みし空間よ、あるべき場所に戻れ……」

ゴオオオオオアアアアア。

『……を……しも……』

微かに地を這うような声らしいものが聴こえたが、ここで止めるわけにはいかない。そんなことをしたら、力が逆流して、門が大きく開いてしまう。

僕は腹にグッと力を込めた。

「閉じよ！ 魔界の門！」

『われ………ヲを………よ』

目に見えない声を裂く様に僕の掌から青白い光が照射され、門へと一直線に注ぎ込まれた。光は門の中央から門を包み込むように広がり、やがて門が振動と共に閉まり始めた。

元からそんなに開いていなかったその門は、あつと言つ間に閉じられた。ピタリと閉じられた門は静けさを取り戻すと、やがて空気に揺らめくように消え去った。

「……」

しばらくの間、その場には沈黙が流れた。いつものジェニーの軽口やおどけた拍手は無く、しんと静まり返った森の中で、思い出したように風が動き始めた。

「……しら？」

微かな声が聴こえたような気がしたけれど、僕の身体はまだ、水の上に浮いているかのような気だるい疲労感に包まれていた。身体の底が、何かに共鳴しているような感覚さえ感じる。

（何だったんだ、今は……？）

僕は、僕が閉じた門のことを考えていた。声は、あの中から聴こえた。『あれ』は、一体どういう意味だ……？

その時、誰かが僕の肩を軽く叩いて、僕はハツとしてその方向を振り返った。

「大丈夫か？ ダン」

そこには、柔らかな面差しの中にも真剣な瞳で僕を見つめるアンガスが立っていた。

「体調でも悪いのか？ 顔色が少し悪いが」

アンガスの肩越しに、少し心配そうな顔をして僕を見つめるティアナが見えた。

僕は二人に軽く微笑んで見せた。

「いいえ。確かに少し、疲れたけれど。でも、大丈夫です。ただ…」

そう言い掛けて、僕は門のあった方向を見た。そこにはもう門の形跡は無く、ただ、木々が見えるだけだった。

「ただ、あの声が気になって…」

「声？」

ティアナが眉間に皺を寄せながら僕に近付いてきた。

「何を聞いたの？ ダン…」

妙に真剣な声でそう尋ねるティアナの顔を見ると、彼女の表情もまた、真剣さを帯びていた。そんなティアナの様子に少し驚きながらアンガスを見ると、彼も食い入るように僕を見ている。

「え…？ お二人には、聴こえませんでしたか？ 多分、さっきの門からだと思うんですけど」

僕がそう言うと、ティアナが眉間に皺を寄せた顔を僕に近づけながら、低い声で尋ねた。

「ダン。その声は、何て言っていたの…？」

僕は記憶を思い返した。あの、途切れ途切れに聴こえた不思議な声。その声を脳裏に思い出しながら、僕は答えた。

「確か…。『鍵を持ちし者よ、我らにパンドラを与えよ』って」

「…！」

途端に、ティアナとアンガスの顔が硬直し、二人の目が見開かれた。二人は無言でお互いの顔を見つめあうと頷き合い、アンガスの「行くぞ」と言う短い合図で、僕らは無言でその場を後にした。

僕はどうやら、見事に地雷を踏んでしまったらしい。

その日、少し遠くの門を閉めに行っていたジェニーとマイクが戻ってくると、大人達は皆、「大事な話があるから」と言ってマイクの書斎に入ってしまった。

「何あれ。ところで、どうだったの？ 門はちゃんと、一人で閉められた？」

ジェニーがポテトチップスの大きな袋を左手に抱えてキッチンからやって来ると、僕にそう尋ねた。それに僕はただ黙って頷いた。ジェニーは首を傾げながらポテトチップスの袋を力一杯に開けると、ソファに座りながら数枚のポテトチップスを一度に摘まんで口の中に放り込んだ。

「じゃ、なんれあんわに、あわれてるのふあなあ？」

ジェニーがポテトチップスを頬張りながら視線を書斎のドアに移した。ここからは彼らの話し声は聴こえてこないが、何を話しているかは大体の見当がつく。つくけど、それが何故なのかがわからない。

僕にだって、大人達が「何であんなに慌てているのか」見当も付かない。

「あのさ、ジェニー」

僕はダメ元でジェニーに尋ねてみることにした。「ん？」と言いながら、ジェニーが顔を上げる。口の周りはポテトチップスのカスだらけだ。ジェニーの少し間の抜けた顔を見て、ほんの少し、僕の緊張が解けた。

「今日、僕が門を閉める時に門の中から変な声がして、それが『鍵を持ちし者よ、我らにパンドラを与えよ』って言ってたんだけど、それってどういう意味か、ジェニーならわかる？」

僕の間に、それまでムシヤムシヤと忙しくポテトチップスを食べ続けていたジェニーがピタリと止まった。見開かれた大きな青い瞳に、僕の顔が映る。徐々にジェニーの顔が青ざめていく。

「えっ？ ジェ、ジェニー？」

僕がジェニーに問い掛けると、ハッと我に返ったジェニーが涙目

になりながら喉を押さえた。

「み、みじゅ…」

「うわっ」

僕は慌ててキッチンまで走ると、水を入れたグラスを持ってリビングに戻った。ジェニーはそれを勢いよく飲み干すと、「ぷはー」と言いながらソファの背もたれに身体を沈めた。

「大丈夫…?」

「うん…。サンキュー。あー、ビックリした!」

「僕も、ビックリしたよ…」

「あ、ゴメンゴメン。だって、ダンがいきなり、あんなこと言うから…」

「あれって、そんなに驚くこと? 僕がそう言ったら、途端にティアナとアンガスも固まっちゃったんだけど」

僕の言葉に、ジェニーが「もつともだ」と言うような顔をして頷いた。僕には理由がわからない。

「ねえ」

ジェニーが小声でそう言いながら僕に顔を近づけた。

「な、何…? っていうか、近いんだけど、顔…」

妙に焦る僕にお構い無しで、ジェニーは僕と息が掛かるくらいの距離まで近付くと、息を殺しながら言った。

「ダン、どこまで知ってるの?」

「どこまでって…?」

僕の問に、ジェニーはチラッと書斎のドアを見ると、今度はさらに僕の耳に顔を近付けて囁いた。

「『パンドラ』と『鍵』のこと」

ジェニーの息が掛かった耳よりも、ジェニーの口から出された二つの言葉の方が気になった。

(『パンドラ』と『鍵』…? 箱じゃなくて、鍵…?)

僕は自分の記憶の中を必死に検索してみた。でも、これといった情報は出て来ない。

「『パンドラ』って、あの、有名なギリシア神話の話だろ？ 『鍵』
つてのは、ちよつとわからないけど。そもそも、鍵なんて出てきた
つけ、あの神話…？ 箱の間違いじゃないのか？」

僕の答えを聞いて、ジェニーは天を仰いだかと思ったら、今度は
頭を抱え始めた。

「ああ、もう…。こりゃ、父さんと母さんが部屋から出て来るまで、
待たないとダメね」

「はあ？」

丁度その時、カチャリと言う音が聴こえて、書斎のドアが開いた。
中から、葬式帰りのような奇妙な顔をした大人達が出て来る。

（何が、起こってるんだ…？）

「ダン。ジェニー。こちらに来て座りなさい。話がある」

マイクの言葉に促されて、僕らはマイクが座った丁度真正面の席
に移動した。僕らが座るのを見計らって、ローラやジョアンおばあ
ちゃん、ティアナとアンガスもそれぞれ腰を降ろした。

リビングの中に少しの沈黙と、身を切るような緊張が張り巡らさ
れる。息をしたら喉を掻き切られるんじゃないかとさえ思えた。

やがて、マイクが一つ深呼吸をしてから、僕の名を呼んだ。

「ダン」

「は、い…」

マイクの表情は、いつに無く真剣だ。声にも、いつもと違った緊
張感がある。マイクは僕の目を真っ直ぐに見詰めながら口を開いた。
「君にこれから話すことは、君が門の番人の検定試験に合格したら、
追々話そうと思っていたことだ。まあ、ティアナとアンガスからは
合格の内定が出されたから、今なら心置きなく話せるが。だが、こ
の件は、時が来るまでは、例え相手が番人やハンターであっても、
決して口外しないで欲しい。いいね？」

はい、と頷こうとして、僕はピタリと動きを止めてマイクを見た。
「それは、ダグに対しても、と言う意味ですか…？」

僕の問い、マイクは少し肩から力を抜いて苦笑しながら首を横に

振った。

「ああ、いや。ダグとアルは既に知っていることだ。だが、だからと言って、例えばあの2人の前だとしても、ここ以外の場所ではこれから話すことを口外しないと約束して欲しい」

事は、僕が思っていたよりもよっぽど重要らしい。

僕は座り直して背筋を伸ばすと、深呼吸をしてからマイクに言った。

「…わかりました」

「うむ。それでは、話すよ。少し長くなるけどね」

そう言つと、マイクは静かに語り始めた。

それは、僕が知っていた神話とは少し違った、「神話」と言う名で覆い隠された、番人達の始まりの歴史――。

- - - - -

太古の昔、神族と魔族がこの大地の覇権を争い、勝利を手にした神族は彼らの持つ力を利用して空気を歪め、そこに作った魔界という別の世界へと魔族を追いやった。

全てを追いやった後、神族はこの世界と魔界を完全に隔離しようと試みたが、どうやってもそれは成功せず、大きな穴が魔界とこちらをつなぐ接点として残ってしまった。

魔族が再び争いの種を撒き散らすことを恐れた神族は、その場所に巨大な門を作つて穴を塞ぎ、魔族がこちら側に入つてこられないようにした。門は神族の力と『鍵』を以つて強固に閉じられ、それで全てが終わると誰もが思っていた。

神族は門番にある男を任命し、その役目はその子、そして孫へと受け継がれていった。

時は流れ、門の持つ本来の意味を、誰もが忘れ始めていた。

ある時、何代目かの門番の男が、神殿で一人の巫女に一目惚れを

した。娘の名はパンドラ。彼女は大勢いる巫女達の中でも、飛び抜けて美しい女だった。

男はパンドラを何とか自分の妻に迎えようとしたが、彼女は一向に彼の結婚の申し出に応えようとはしなかった。

そこで彼女の興味を引くために、男はパンドラに門を見せた。

「この門は私の一族が神より賜りし門。我が一族はこの門を代々守ることを誇りとして生きています」

パンドラは男に、その門の先には何があるのかと尋ねたが、男は代々「開けてはならぬ」と申し伝えられているだけで、その先にあるものが何なのか、全く知らなかった。パンドラは目の前にそびえる壮麗な細工を施された巨大な門に心を奪われた。

門に魅せられたパンドラは門番の男と結婚した。毎日の生活の中で、パンドラは門の話を男から少しずつ聞き出していった。それによつて判ったことは、門は神の力によつて固く閉ざされていることと、鍵は門番が持っていると伝えられているが、男はその鍵を見たことが今までに一度もないと言ふことだった。

神の力で封じられ、あるはずの鍵がどこにあるのかもわからない。しかし、その事實はパンドラの妄想を掻き立てるだけだった。

（そこまでして封じられているものだ。あの門の美しさから言つて、きっと中には素晴らしいものが隠されているに違いない。私はそれを、この目で一度でいいから見てみたい。そして、できるなら、それを私の物にしたい）

結婚して巫女ではなくなったものの、パンドラは毎日神殿に通い、祈りを捧げ、神殿で下働きをしながら神殿に保管されている古書を読み漁った。そして、彼女は見つけた。

『鍵は、門番の血』

神は門を封じる時に、神の愛した女の血を使った。生贄となる前に、女は神との間に男子を産んでいた。成人するまで神によつて育てられたその息子こそが、番人の始祖であった。

「何だ。簡単なことじゃないの」

パンドラは家に帰ると、門番に酒を振舞った。酔い潰れそうになった門番に、パンドラは「門が見たい」とねだり、二人は門へと向かった。男は、パンドラが隠し持ったナイフには気付かなかった。

門の前で、パンドラは男を刺した。赤い血が一面に飛び散り、まるで門に赤い花が咲いたようだった。男の返り血を全身に浴びながら、パンドラは笑顔で門に向かって両手をかざした。かつて、この国一番の巫女と讃えられたパンドラの力は衰えることなく、門は彼女の呼び掛けに応え、封印は解けた。

重い音を立てながら開いた扉の向こうから、黒い霧が湧き起こり、魔族たちがなだれ込み、世界は闇に包まれた。

異変に気付いた神は、すぐさまに事態の収拾に努めたが、全ての魔族を門へと追いやる間に、地上では争いが盛んになり、犯罪が溢れ、多くの血が流された。

神族が再び魔族を門の向こうに追いやることに成功したが、一度封印の解けた門は再び鍵によって封印されることは不可能だった。そこで、神は閉じられた門を打ち砕いた。砕かれた門は沢山の大小様々な種となった。神がそれらを空中にばら撒くと、門の種は風に乘って世界中へと散らばった。

その頃、パンドラは壊滅した町に一人、取り残されていた。神は彼女を拾うと、彼女と彼女が宿していた門番の子供に「門の番人」となることを義務付け、門を閉じるための技を教えた。

その日から、パンドラとその子供は、各地に散らばった門の種から生まれた門を閉じながら世界中を彷徨う宿命を負うことになった。パンドラの罪と力は、母から娘へ、娘からその娘へと、その血を以って繋がれていった。

パンドラによって殺された門番の魂は、『鍵』の力を秘めたまま彷徨っているのだと言う。

鍵の力は表裏一体。

その力は、門を開ける力にも、閉じる力にもなりうる力。

破滅の力にも、希望の力にも、なりうる力。
鍵は転生を続け、来るべき時にはパンドラと出会っただろうと伝えられる。

- - - - -

「パンドラの箱に最後に一つ残った希望っていうのが、実は門番の魂で…。そしてそれが、僕の中に…？」

「まあ、君の聞いた声と照らし合わせると、そういうことになるのかな」

穏やかに話すマイクとは反対に、僕の心臓はバクバクと速い音を立て、額にはイヤな汗が滲み出していた。

（何だ、それ…？ 僕は…？）

「その、故事を元に考えると…。僕は、将来的に生贄にされることもありうる、と。そういうわけですか？」

「させない」

僕のすぐ隣から、ジェニーの凜とした声が響いた。僕が横を向くと、ジェニーの青い瞳が真っ直ぐに僕を見ていた。

「そんなこと、私が絶対にさせない。私が『パンドラ』になっても、私は絶対にダンを死なせない」

「ジェニー…」

ジェニーの決意に満ちた瞳を見ながら、ふと、僕はあることに気付いた。

「えっ？ 君が『パンドラ』になっても』って、どういうこと？」

困惑しながらマイクとローラを見ると、二人は「困ったな」という顔をして僕を見ていた。

「あら？ まだ話してないの？」

呆れ顔でティアナがそう言いながら、首を傾げた。

「ああ。ダンが番人として認められたら、と思っていたからね。そ

れに、ジェニーが18になるまで、まだ1年以上あるし」

マイクが苦笑しながらそう言っていると、ローラが困ったように微笑みながら頷いた。

「じゃ、じゃあ…。もしかして、ローラがパンドラの子孫？」

僕の問に、ローラが頷いた。

「ええ、そうよ。私の家系は、18になるとパンドラと呼ばれ、自分の娘が18になってパンドラを継ぐまで続くの。来年の夏にジェニーが18になったら、パンドラがジェニーに移るのよ」

「『移る』…？」

ああ。何だか、わけのわからない話になってきた。だけど、ローラはニツコリと微笑むと僕に言った。

「ええ。全てのパンドラから生まれた女の子がパンドラになっちゃったら、大変なことになるでしょ？ この世界がパンドラだらけになっちゃうわ。だから、誰が決めたのかは知らないけれど、この世でパンドラとしての力を持つ者はただ一人、いればいいの。娘が沢山いる時は、その中から一番力の強い娘を選んで、その子が18になるとパンドラを受け継ぐようにするの。今のパンドラは私だけけれど、来年からはジェニーになるわ。そうしたらー」

ローラの顔が途端に真剣になって、僕は息を飲んだ。

「その時は、ジェニーのことを宜しくね、ダン」

どう、答えたらいいのか、僕にはわからなかった。一体、僕は何者なんだ？ 僕に彼らは、何を望んでいるんだ？ 僕は、何を信じればいいのだろう？ ただ、生贄にされる日を待つただけに生かされるのか…？ 何だ、それ…？

僕の中で、何かが奥の方で砕けた。

急に喉が渴いて、目の前が霞んだ。目の前にいるはずのマイクとローラの顔が空気に溶ける。

（ああ、まただー）

そう、『また』始まった。ここしばらくは、この発作も出てはいなかったのに。

頭が重くなつて、真っ直ぐ座ってられない。

「あ、ちょ、ちょっと！ ダン！ しっかー」

ジェニーの声が、少しずつ遠ざかっていった。

昔から、何か事あることに僕はこの「発作」を繰り返した。

別に、身体に異常があるわけじゃない。異常があるとすれば、それは僕の心の中だ。

母さんに真冬の森の中で置き去りにされた時。母さんの「お友達」に殴られた時。酔っ払った父さんにビール瓶を投げ付けられた時。姉さんと彼女の友達に襲われた時。

（僕だけ、どうして…？ 僕が一体、何をした…？）

そう思う度、僕はここに来る。

ここは、砂漠の真ん中。

まだ幸せだった頃に、母さんに読んでもらった「星の王子様」の絵本がよつぽど印象に残っていたのだろう。よく考えたら、母さんに絵本を読んでもらったのは、あれが初めて最後だったような気がする。

砂漠の真ん中で、僕は一人だ。周りには、何も無い。

「星の王子様」には色んなキャラクターが出てくるけど、僕の砂漠には、僕以外何も無い。

ーオマエハ、ヒトリダ

ーダレモ、オマエノコトナンテ、シラナイヨ

僕の頭の中に、声が響く。

わかつてる。わかつてる。わかつてる…。

そう呪文のように唱えながら、膝を抱えて砂の上に座る。膝の間に顔を埋めると、大抵はいつも、そこで目が覚めるんだ。

でも、今日は違った。

「ここに、いるよ？」

ずっと、探していた声が聴こえる。

「ずっと、ここにいるよ？」

手に、暖かな温もりを感じる。

「だから、帰ってきて」

どこに？ 僕の家は、どこにも無い。

「帰ってきて、ダン…！」

声に導かれるように、僕は顔を上げた。そこには誰もいなくて、砂漠が広がるだけだったけれど、何故だか僕は、そこから出るための出口を知っていた。

「今、行くよ」

誰に言うでもなく、そう呟くと、僕は砂漠の中を歩き始めた。白くて強い光が遠くに見えて、僕は眩しい光に目を細めながら、その中にどんどん入って行った。

大丈夫。手にはまだ、温もりがある。この手が、僕をきつと導いてくれるから。

「あ、気が、付いた…？」

震えるような小さな声が聴こえて、僕は声のする方に顔を動かした。首を動かしながら、僕は自分が横になっていることに気付く。

「ああ…？」

声が擦れて、変な声が出た。

「水、持ってきて来るね？」

ぼやける視界の中で、ジェニーらしい人影が動いて去って行った。僕の手から、温もりが薄れて消えた。

「あ…」

待ってくれと言おうとしたけど、声が出なかった。喉がカラカラに渴いていて、ヒューヒューと変な空気音が出るだけだ。

（よりによって、ジェニーの前で倒れたのか…？ 最悪だ）

重い身体を動かすのを断念して、僕は軽く目を閉じた。

（何年ぶりかな、これ…）

最後に倒れたのはいつだったか、思い出そうとして、止めた。そんなことをしても、思い出したくないことを思い出すだけだから。

しばらくして、ドアを申し訳程度にノックした後、ジェニーが入って来た。

「はい、お水」

「あり、がと…」

ジェニーに助けてもらって身体を起こしながら、水を飲んだ。冷えた水が、砂漠を潤すように僕の身体に染み渡っていく。その感覚が気持ちよかった。

飲み終わると、ジェニーの暖かな手が僕の額に触れた。

「熱は…。無いみたいね」

「病気じゃ、ないから」

「うん。ダナさんから、聞いた」

「え？」

いつの間に、僕の義母から僕の話聞いたんだろうと疑問に思っていると、ジェニーが申し訳なさそうな顔をして、僕に言った。

「ごめん。父さんとアンガスは呼吸も心拍数も問題無いから大丈夫だって言ってたんだけど、何か、大変な病気だったらどうしようかと思って、ダンの部屋を無断でちょこっと探して、この間ダンがもらってたダナさんのカードを見つけて、それで、電話したの。勝手に色々しちゃって、ごめんなさい」

「そう…。ううん。構わないよ」

ダナが父と一緒にだった最初の頃は、僕の発作は無かった。でも、しばらくして父の酒癖の悪さが悪化して、ダナに乱暴をするようになった後、一度家で倒れた。その時に、ダナが「放っておけ」と言う父を無視して、僕を病院へ連れて行ってくれたことがあった。

ある意味、ダナは僕のこの発作のことを、唯一「正しく」知っている人だ。

「ダナさんがね…」

そう言いながら、ジェニーが僕の手を握った。

「ダナさんが、『ダンの手を放さないであげて』って。『薬よりも、こっちの方が効く』って言ってたけど。どう、かな…?」

半信半疑なジェニーの表情が可愛くて、僕は少し笑った。

「あ、もう…」

ジェニーは一瞬、膨れっ面をしてみせたが、すぐに得意気な顔をした。

「笑顔が出るってことは、効いたってこと。だよな？」

「さあ、どうかな…」

「もう。素直じゃないなあ…」

ブーと言いながら唇と尖らせるジェニーは、僕が出会った頃から変わっていない。この、表情をコロコロ変える女の子は、その存在がどれだけ僕を救ってきたか、全く知らないでいる。

そうか。僕はもしかしたら、ジェニーと会えなかったら、きっと心の中のあの砂漠に行っただけ、戻ってこられていないのかも知れない。僕が今、こうしていられるのがジェニーのお陰だとするならば、僕がジェニーにしてあげられることは――。

「ジェニーなら、いいよ」

僕の言葉に、ジェニーはキョトンとした顔をして僕を見た。

「へ？ 何が？」

「ジェニーのためになら、僕は賛^{にえ}になってもいい」

途端に、ジェニーが険しい顔になった。

「…バカなこと、言わないで」

はつきりと言われたその言葉には、明らかに怒りが込められていた。

「門なんて、こちら側から開くもんじゃないわ。閉じ続けるためのものよ。私は始祖の業を背負ってるけど、ダンはそれに縛られることは無いと思う。ダンは、ダンだもの」

「でも、僕は…」

門番の、魂を持つんだろう？ 『鍵』なんだろう？

そう言い掛けた僕の唇に、ジェニーの指が当たって言葉を遮った。「いい？ 私は、ダンを『鍵』にしたりしない。例え何万の人たちがそれを望んでも、私はダンを守る」

「でも――」

神は門番の始祖の血を使って、門を封印した。それが出来れば、門の番人が新月の度に門を閉め続ける必要は無いんじゃないか？

そう、言いたかったけれど、ジェニーの悲しそうな瞳を見て、僕は口をつぐんだ。ジェニーもわかつているんだ。ジェニーだけじゃなく、多くの人たちがそれを知っている。

ジェニーはちよつと肩をすくめながら言った。

「協会には、ダンが『鍵』だつてこと、知られちゃうと思う。でも、今は昔と違うわ。昔は門が一つだったから、それを封印すれば事は済んだけど。今はあちこちに出るから、それをいちいち封印してたら、私達の身体がもたないよ。だから――」

そう言いながら、ジェニーは僕の手をぎゅつと握り締めた。

「ダンは、ダンのままで……。そのまま、私の側にいて？」

僕の、ままで。

そうだね。僕は、一番大事なことを、忘れていたよ。

小さな頃から、ずっと思ってた。ジェニーの側にずっといることができたなら、僕はどんなに幸せかって。それを君は、許してくれるんだね？

「……うん」

そう言つて小さく頷くと、ジェニーが安心したように微笑んだ。

この手をずっと、放したくない。そう、強く思った。

- - - - -

ダンの番人検定試験から、気が付けば三週間が過ぎていた。

あれから変わったことと言えば、まず、ティアナとアングスが去つてから4、5日して、ダンに番人の証明書が送られてきた。証明書は運転免許証みたいな感じで、政府の鷲のエンブレムが偉そうにプリントされた台紙に名前が印刷されて、写真が入ってる。写真の

上には、さらに御大層にエンブレムが押してある。かなり「俺って特別？」って全身でアピールしているカードで、正直な話、持ち歩くのが恥ずかしい。

まあ、持ち歩いてるからって、誰に見せるわけでもないんだけど。でも、番人の仕事をする時は、必ず持つてなくちゃいけないんだよね、これ。門って、時々変な所に来るから。そういう場所にある門を閉めるのに、侵入した先で、万が一警察に逮捕でもされたら見せなさいってことらしいけど。でも、私は今まで、そんなヘマは一度もしたこと無いけど。って、これじゃまるで、私って泥棒みたい？

ティアナとアングスはうちを去る前に、父さん達と私とダンの今後について、何やら色々と話合ってたみたい。協会にどう報告するかとか、来年の私の引継ぎをどうするかとか、ダンと私は一緒にしておいた方がいいのか、それとも離れた方がいいのか、とか。

私はダンを私と離すのには猛反対した。私の先祖がしたこと、どうして私の人生にまであれこれ言われなくちゃいけないの？ 冗談じゃない。

違う大きな変化といえば、ダンの義理のお母さんのダナと、最近電話で話したり、週末に会ったりするようになった。ダンのことで電話してから、心配したダナが私の携帯に電話を掛けてきたりして、それから何となく世間話とかするようになって、気が付いたら何か、友達みたいになってた。

先週末も、ダンと一緒にダナの家にランチに招待されて行ってきた。ダナが今、娘のキャリアと一緒に住んでいる所は小さなアパートだけど、とてもキレイに整頓されていて、キャリアの描いた絵が壁に貼られていたりして、とてもかわいい部屋だ。

その日は天気良かったから、みんなで近くの公園に食事を運んで、そこでピクニックをすることにした。

昔からダンに懐いていたキャリアはダンに会えるのが嬉しいらしくて、ずっとダンにべったりと付きまとっている。学校の女の子達

がそうするのはムカつくけど、キャリーは子犬のようで可愛らしくて、もう、「どんどん構ってやって下さいまし」ってこつちが言いたくなるくらい、カワイイ。ダンも何だか、キャリーと遊んでると楽しそうだし。

ダンと一緒にキャッチボールをして遊ぶキャリーを見ながら、私とダナはピクニックシートの上で寝そべりながら、他愛も無い世間話をしていた。ダナさんはよくダンの学校でのことやうちのことを聴きたがる。きっと、自分が家を出た後の時間を埋めようとしているのだと思う。

「それで、ダンは最近妙にモテるんで、困ってるんですよ〜」

私がちよつとふて腐れながらそんな話をする、ダナはケラケラと笑った。ダナはうちの母さんと違って、下町っこって感じで、さくで気取った所が一つもない。そこが私は好きなんだけど。

「そうね。ダンは、ダンのお父さんの若い頃に似て、男前になってきたわね」

「えっ？ あのオジサンが、お、男前っ？」

私ははつきり言って、小さい頃にダンのお父さんを見たことが無い。初めて会った時には、もうすでにビール腹で無精ひげを生やした、スケベで暑苦しいオジサンだったのだ。

「ええ。私が出会った頃は、ダンよりもうちよつと肉付きがいい感じで、かっこよかったわよ。じゃないと、私だって結婚しないわよ。アハハ」

「はあ。そうですか…」

「あら。男は顔と身体と甲斐性よ？」

「顔と、かつ、身体…？」

「あらあゝ。身体は重要よ？」

ダナは最近、私の事を女友達と思っているらしく（いや、それは嬉しいんだけど）、話が突然「深夜のガールフレンド・トーク」になることが多々ある。この短い間で、私も少し女子力のレベルアップをさせていただいた。とは言っても、早い話が耳年増になつて

だけな気はするけど。でも、ダナに言わせると、「知識も重要」とか…。

「まあ、あの人も、結婚当初は3つ揃えだったんだけどねえ。男って、どうして結婚すると、嫁に対する態度がずさんになるのかしら？ 最初の旦那もそうだったわ」

こ、これは、どう相槌を打ったらいいんだろう？

「は、はあ。勉強になります…」

恐縮する私に、ダナが明るく笑って言った。

「あら。ダンは大丈夫だと思うわよ？ 多分…」

「ええっ！ えっと、えーっと…」

「あら。そういう仲じゃないの？」

ダナが「信じられない」と言う顔をして私と遠くでキャリーとじやれているダンを見比べた。

「そ、それが…」

「だって、今、一緒に住んでるんでしょ？」

「それはそれ、これはこれですっ！」

私がそう言い切ると、ダナはふうつと溜息を吐いた。

「…あなたも、苦労するわねえ」

「はあ…」

私達はしばらくの間、無言でダンとキャリーが芝生の上で転がっている様子を見ていた。もはや、キャッチボールじゃなくなってる。「ほら、あの子って、苦労してきちゃったじゃない？」

ポツリと、ダナが言った。

「私ね、あの家を出る時、本当はダンも連れて行こうと思ったの。ダンも、私に懐いてくれてたし。でも、あの頃の私は、キャリーを守ることで精一杯で…」

遠くで、キャリーがゴムボールをダンに向かって笑いながら投げ付けている。ダンがわざと逃げ回っていて、その様子が何だか微笑ましい。

「大人って、勝手よね。私は、あの子を助けてあげられなかったの

に、今はただ、それを許して欲しいって思ってるんだもの」

ダナは寂しげにそう言っただけで、私にはわかる。

「ダンなら、許してくれますよ」

「そう？」

私はダナに向かって頷いた。

その時、「休憩」と言っただけで笑いながら、キャリーとダンがこちらに向かって歩いて来るのが見えた。

「はあー。疲れた」。キャリーがなかなか開放してくれなくてさ」

そう言いながら、ダンが私の隣にゴロリと横になった。

「はい、水」

ペットボトルに入った水を手渡すと、「サンキュー」と言いながらダンが少し身体を起こしてボトルを開けた。つい、ダンのTシャツの下で動く肩の筋肉に目が行ってしまう。肩幅も、随分と広くなっちゃったな。

「ん？ どうしかした？」

何も言わない私が変わったと思ったのか、ダンが顔を上げて私を下から見上げた。その表情が妙に、こう、何だか「色っぽい」って言うか…。

（その視線は、反則〜〜！！）

顔が火照ったように感じるのは、絶対に日差しのせいだけじゃないと思う。

「ふーん」

咄嗟に顔を背けた私に、何やら意味ありげな声を出すと、ダンは少し身体をずらして、側に置いてあったピクニック・バスケットをこじ開け、その中に入っていた余っていたサンドイッチを取り出して食べ始めた。それを見たキャリーが、ダンの真似をしてサンドイッチを食べ始める。

「あらあら。よっぱどいい運動だったのね」

ダナが笑いながらキャリーのコップにレモネードを注ぐ。

「だって、ダンって足が速いんだもん。全然、追いつけなかった」

キヤリーが楽しそうにそう言うと、ダンが笑いながら「脚の長さが違うからな」と言って笑った。

私達はしばらくの間、のんびりとピクニックを楽しんでいた。

「あ……！」

ふと、ダンが小さく声を上げて息を飲んだ。

「？　どうかした？」

私がダンが凝視している方向に目を向けると、遠くに、こちらを見ながら何やら話しているカップルが見えた。男性の方に見覚えはないけれど、女性の方は、何となく見覚えがある。

「あれは、クリス……？」

ダナが少し緊張したような声でダンにそう尋ねると、ダンが頷いた。

「うん。あいつ、こんなところまで足伸ばしてるのか。厄介だな」

クリスと言うのは、ダンの血の繋がったお姉さんだ。確か、3つくらい年上だったような記憶がある。美人ではないけどグラマラスな印象が強い人で、見かけたことは数えるくらいしかないけど、余りいい噂は聞かない。だって、「お酒やタバコをやっている」っていう程度の話じゃないんだもの。

「ダナ。そっちには多分、直接ちよっかいをかけては来ないと思うけど……。念のため、しばらくの間は戸締りとか、気をつけて？」

ダンがそう言うと、ダナは頷いた。

「ええ。そうするわ」

家に帰る車の中で、私はダンに何故、ダナにクリスのことで注意を促したのかと尋ねてみた。

「クリスって、昔から手癖が悪いんだ。ダナがうちにいた時も、何度かダナのジュエリーを盗んで、それを売って小遣いにしてたし。今だって高校を1年もしないうちに中退して以来、ずっと働かないでフラフラしっ放しだからね。ダナがこの近辺に住んでるっていうのを知って、それを黙って見逃すようなヤツじゃないから」

前から思っていたけれど、ダンは自分の血の繋がった家族に対し

て、かなり辛口のことを言う。そうだった理由は色々知っているけれど、きっとダンのことだから、当たり障りがなさそうなことしか、私には話してくれていないと思う。まあ、全部を聞いても、多分、私には何も出来ないだろうけど。

そんなことを思いながら運転していたら、ダンの実家が遠くに見えた。相変わらず、人が住んでいるとは思えないような家だ。ダンがうちに引越してから、ますます廃墟っぽくなったような気がする。

ダンの家の前を通り過ぎる間、私達はずっと無言だった。

私の家では、母さんが相変わらず台所で何かを焼いているみたいで、甘い匂いが玄関まで漂っていた。

「あら、二人とも。おかえりなさい。今日は、チョコレートケーキにしてみましたけど、今すぐに食べるかしら？」

チョコレートケーキはダンの好物だ。きつと、今日はダナと会うってわかってたから、張り合ったのね、母さんなりに…。

「母さん。私達、まだお腹一杯で、今は何も食べられる状況じゃないけど…？」

私がそう言っていると、隣でダンも申し訳なさそうに左手で胃を抑えながら頷いた。

「あらあゝ。残念。じゃ、これはディナーの時のデザートにしましよ」

クルッと身体を軽やかに反転させながらキッチンに戻っていく母さんの後姿に「ありがとう」と声を掛けた。後で「母さんの料理が最高！」とかつてフォローを入れておこうかな。最近、私がダナと仲良くしているのが、母さんはどうやら少し悔しいらしい。でも、焼もち焼かれても、ねえ…？

「さて、と。じゃ、私、一旦部屋に戻るね？」

そう言って二階の自分の部屋に戻ろうと階段を昇ろうとしたら、ダンに呼び止められた。

「何？」

振り向いた瞬間、目の前が真っ白になった。

正確には、白プラス、公園で付いたと思われる泥が少しと芝生の青汁も少々…。加えて、汗の臭い。

何が起こってるのかよくわからなくて、周りを見ようとしたけれど、身体が何かに縛られてて、かなりのロックオン体制で動けない。

（え？ ええ？ 何これ？）

耳に直接、心臓の音が響く。でも、私の心臓の音とは、少しずつれてる。

（あれ？ これって、ダン…？）

そう思っていると、頭の後ろの方からダンの声がゆっくりと響いた。

「今日は、サンキュー。楽しかった」

「え？ あ、うん。私も…」

ロックオンが少し解除になって、心臓の音と白がゆっくりと遠ざかる。あれほど驚かされたのに、こうやって離れると、少し寂しく思ってしまうのは何故だろう？

「じゃ、また後で」

ダンがちよつと照れたような顔でそう言っつて、サツと階段を駆け上って行ってしまった。

何だっただろう、今の…。

それから六月の最後の週が終わり、私達は高校最後の夏休みに突入した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8535s/>

門の番人

2011年6月25日00時55分発行